みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Koryak and Even of Kamtchatka Peninsula, Far East Russia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5786

ロシア極東カムチャッカ半島のコリヤークとエヴェン

：1996年エッソ調査報告

岸　上　伸　啓

（英文要旨）
Ethnological research of the Koryak and Even was conducted by Nobuhiro Kishigami in Esso and Anavugai on Kamuchatka Peninsula of Russia during a two week peiord from 27th of November to 10th of December in 1996, as a part of larger project "Research of Song and Dance of Koryak and Aluet in Kamchatka"(Monbusho Kokusai Kaken #08041002) directed by Professor M. Oshima of Otaru University of Commerce. This is a report of the research expedition. In this paper, I decribe subsistence activities, hunting and fishing rituals, festivals, marriage, inheritance systems, childbirth, names and naming , funeral, beliefs and world views, shamans and shamanism and calenders of the Koryak and Even of this century, and then compare those cultural elements between the peoples.

１．はじめに

１－１．本稿の目的

私は、1996年10月31日から12月17日までの約１ヵ月半の期間、ロシアのカムチャッカ半島のコリヤーク民族の民族芸能および儀礼に関する現地調査に参加する機会をえた。この調査は、北海道教育大学の谷本一之（元）学長によって始められ、現在では小樽商科大学の大島稔教授を代表者として継続されている。調査全体の目的は、グリーンランド、北米極北地域、ユーラシアの極東地域の先住民族の歌や踊りなど民族芸能を録音、ビデオに収録するとともに、その分布や特徴に関して比較を行なうことである。そしてこの調査に付随するものとして、言語、狩猟・漁撈、各種の儀礼、シャーマニズム、社会組織などについても調査が行なわれた。

今回の主な調査地は、カムチャッカ半島の根元の西側の内陸にあるスラウトノィエ村であった。この村には、トナカイ牧畜を主な生業とするコリヤークやチュクチらが

ロシア人とともに住んでいる。この村でのコリヤークの民族芸能調査の後、1996年11月27日より12月10日までの約２週間、私はロシア人通訳とともにカムチャッカ半島の中部内陸にあるエッソという町を訪れ、そこに住む先住民コリヤークとエヴェンの生業、狩猟儀礼、名前、民族暦、信仰などについて調査をおこなった。

本稿の目的は、エッソでの調査の成果を整理し、記述的に提示することである。ここでは、調査からえた結果をできうるかぎり忠実に報告したい。このため、既存の文献からの引用などは最小限にとどめることをご了承願いたい。

１－２．調査方法と情報提供者

エッソ調査では、エヴェンやコリヤークの社会や文化についておもに聞き取りによって情報を収集した。調査に協力してくれたインフォーマントの方々は、村役場の文化担当官の方が、紹介してくれた人たちであり、聞き取り調査は村役場の担当官の部屋かインフォーマントの家のいずれかで１回２時間程度の時間で行なった。エッソ滞在中に下記の方々に聞き取りを行なった。本文中では実名ではなく、文字と番号で話者を示すことにしたい。Kはコリヤークの人、Eはエヴェンの人をさす。

エッソ村
(E-1)Adukanova Maria Konstantinovna　女性　1939年生まれ
(E-2)Tatyana Ilyinishna Tilkanova　女性　1932年生まれ
(E-3)Natalya Ionovna Grigoryeva：E-2の娘
(E-4)Nadeshda Petrvna Adukanova　女性　1914年生まれ
(E-5)Adukanova Lubov Ilyinishna:E-5の妻　1951年生まれ
(E-6)Adukanova Kiryak Petrovich:男性、E-4の息子　1953年生まれ
(E-7)Maya Petrovna Lomovtseva-Adukanov:E-4の娘　1948年生まれ
(E-8)Tilkanova Vera Petrovna:女性、1916年生まれ
(E-9)Tilkanova Tatiyana Egorovna:女性、1917年生まれ
(E-10)Tilkanova Mariya Grigoyevna:女性、1939年生まれ、E-8の娘
(E-11)Elizaweta Ivanovna Ichanga:女性、1926年生まれ
(E-12)Panarina Valentina Mik'hailovna:エヴェン語教師　３０歳代
(K-1)Kauchan Minuevna:K-2の娘：女性、1940年代生まれ
(K-2)Ama Kichinkavavna:女性、1918年生まれ
(K-3)Pelat Anlyo:女性、1924年生まれ
アナヴガイ村
(K-4)Yakov Amontovich Ukipa：男性、1944年生まれ
(K-5)E'talpin Yadginovna Ukipa：女性、1918年生まれ
(K-6)Ukipa Anastasia:女性、E-5の娘
(K-7)Evvach Vikiikovna Chachim:女性、1920年頃生まれ

この調査には、つぎのような問題点があることを明記しておきたい。

第一に、滞在期間が短いために住み込みによる参与観察という調査方法をとることができなかった。このため、今回の調査では聞き取り以外には、表面的な観察しかできなかった。

第二に、調査者は、ロシア語と現地語（コリヤーク語およびエヴェン語）を話すことができないので、英語のわかるロシア人通訳や、ロシア語のわかるコリヤークやエヴェンの人を介しての聞き取り調査であった。本来ならば、調査者とインフォーマントとが直接対話すべきところに、１人ないし２人の仲介者（通訳）が存在することとなった。途中の通訳の過程で、質問が相手に正確に伝わらなかったり、答えが正確にこちらに伝わらなかった可能性も大である。今回の通訳をつとめてくれた２名は、カムチャッカ教育大学で英語を学んでいる学生のArtyom PonomarevとPoliganov Zhenyaであった。両者とも英語はかなりできるが、民族学（文化人類学）のトレーニングは受けていなかった。

第三に、インフォーマントにジェンダーの上で、偏りがみられたことである。インフォーマントは男性２名を除くとすべて女性であった。エッソの町には、60歳以上の先住民の男性がほとんどいなかったので、聞き取りは女性を中心に行なわれた。

今回の調査には、以上の問題点があることを明記しておきたい。

２．カムチャッカ半島の先住民の歴史と現状

２－１．カムチャッカ半島の先住民と民族の問題

現在、カムチャッカ半島には、ロシア人をはじめいろいろな人々が居住している。その中で少数先住民族として位置付けられている人々は、コリヤーク、エヴェン、イテリメン、チュクチ、アリュートらである。現在の彼らの総人口は、カムチャッカ州全体の人口の中では、あわせて３％にも満たない。彼らは主にコリヤーク自治管区、ヴィストリンスキー地区、アレウツキー地区に住んでいる。

ここで帝制ロシアによる極東の植民地化が開始されてから、現在までのカムチャッカの歴史を国家との関係から概述しておきたい。

ロシア帝国は、クロテンなど毛皮の獲得と不凍港の確保を求めて、シベリアへと進出を開始した。そして1632年には、ヤクーツクが東方進出の基地として開設された。

コリヤークの人たちは、1649年ころからロシアと接触しはじめている。1650年代には、コサック兵がカムチャッカ半島西北部のペンジナ湾のコリヤークから毛皮税を取り立てた。さらにコサック兵はコリヤークを軍事征服しながら、同半島の西側を南下し、1690年代には現在のパラナやチギルまで進出している。

1697年から1699年にかけてのアトラーソフのカムチャッカ遠征によって、コリヤークの居住区域をふくむカムチャッカ半島がロシア帝国の領土に加えられた。

1760年代には、多くのコリヤークが抵抗をやめ、毛皮税（ヤサーク）を納め始めた。ロシア帝国は先住民のロシア正教化をはかり、1897年の統計によると、当時のコリヤークの総人口7530人のうち3387人(45%)がキリスト教徒になっていた。

19世紀の末になると、カムチャッカ半島やチュクチ半島の近くには、アメリカの捕鯨船が出現した。19世紀末から20世紀の初頭にかけて、コリヤークの貧困、生活環境の悪化、役人や商人の搾取、伝染病の頻発によって、人口が激減した。この地域を旅行した者によると、コリヤークをはじめとする先住民は消滅の危機に直面していたという。この事態は、1917年に起こったロシア革命によるロシア帝国の崩壊によって、変化がみられた。

1920年代以降、シベリア全域がソ連によって新体制のもとに統合されると、それ以前と比べると、コリヤークら先住民は相対的な物質的な安定と社会的平等をえた。1924年には、北方の諸民族を助けるための「北方委員会」が設立された。さらに1930年には、カムチャッカ民族区が創設された。

1930年代のスターリンの体制下、民族区の形成が進められ、北方の経済体制の再編が行なわれた。その後、定住化の奨励、生産活動の集団化、教育の普及や北方居住者に対する教育、医療や収入の特典の付与などが実施された。この政策は、表向きのうたい文句は何であれ、先住民のソ連化に他ならなかった。多くのロシア人がシベリア地域に入植し1950年代末には、総人口の60%以上を占めるにいたった。

行政上、カムチャッカ民族区は1956年にソ連のロシア共和国の直轄になった。1980年代後半のペレストロイカによるソ連の崩壊によってカムチャッカ半島も大きく変った。これまで対米の軍事的な最前線であった同半島では、外国人には閉じられた世界であったが、それも1992年には開放された。経済の自由化やロシア新政府の経済的支援が弱いために、先住民をはじめカムチャッカの住人は、経済的な混乱のなかで暗中模索の状態にあると言える。

2－2．エヴェン民族について

エヴェン民族は、ヤクート共和国あたりから以東にかけての広大なシベリア、極東地域に分布するツングース語を話す民族である。エヴェンの故地は、満州かモンゴルの北方とする説が有力である。彼らの祖先の一部は、ヤクーツクやオホーツクの方に移動していったらしい。

カムチャッカ半島にはもともとエヴェンは住んでおらず、ロシア人が入ってきた後、19世紀半ばころまでにやってきたらしい。古い探検家の記録に、カムチャッカ半島でエヴェンに出会ったことが残っていない。ドイツ人の旅行者カール・ディトマーの1848年の日誌に同半島のエヴェンのことが初めて出てくるのである。かれらはもともと（漁撈も行なう）狩猟採集民であったが、移動の途上でトナカイ牧畜の技術を習得し、小さなグループに分散して、各地に適応してきた。コリヤークやチュクチは、トナカ

イにソリをひかせるが、エヴェンは野生のトナカイを捕らえ、それに乗っていたという違いがみられた。

現在、カムチャッカ半島には、約2000名のエヴェンがいる。その半数が、エッソやアナヴガイがあるビィストリンスキー地区に住み、残りの半数はアヤンカなどより北方のペンジンスキー地区に住んでいる。彼らはおもにトナカイ牧畜の仕事に従事している。

2－3．コリヤーク民族について

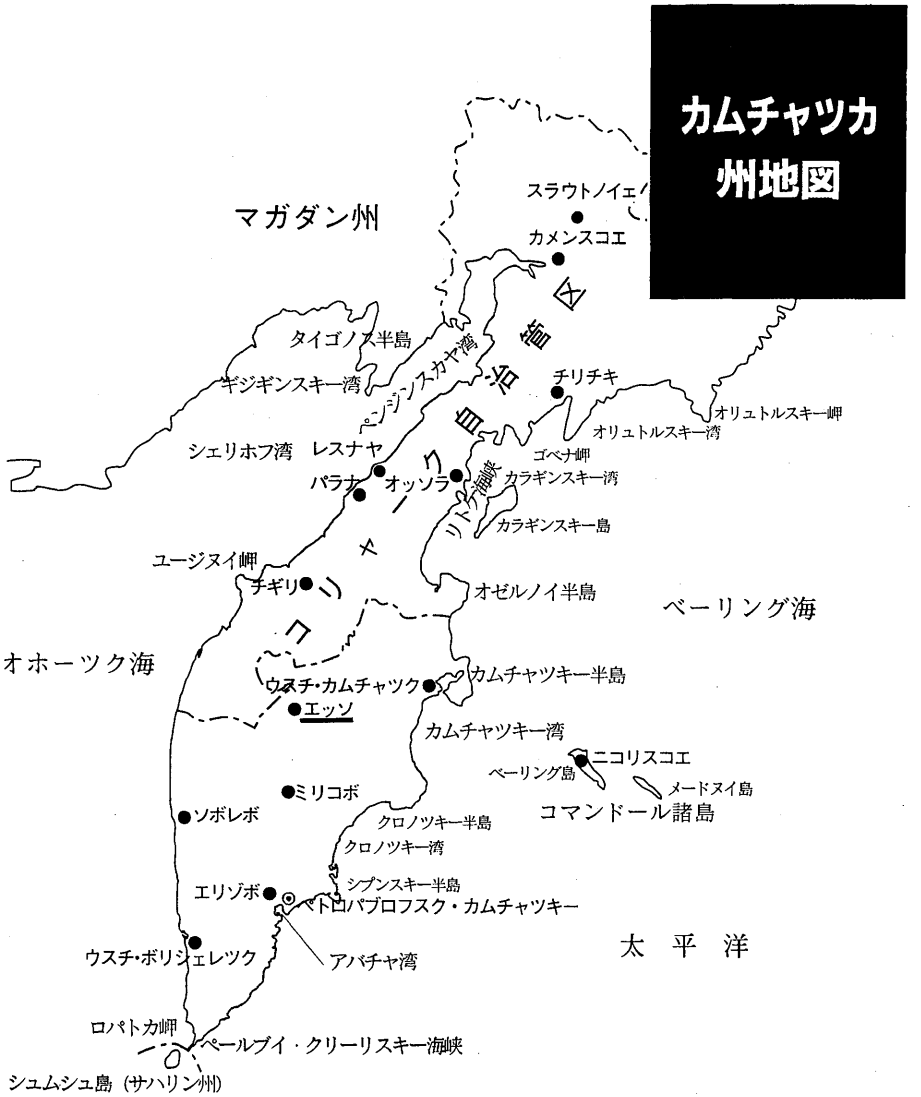
コリヤーク民族とは、カムチャッカ半島のつけ根あたりから半島中南部あたりまでの地域で生活を営んできた先住民族である。コリヤークは生活領域と生業の違いによって、内陸で遊牧生活をおくるトナカイ牧畜民であるトナカイ・コリヤークと海岸部で海獣狩猟や漁撈を主生業とする海岸コリヤークの２つのグループに大別することができる。両者の間には定住度や生活様式のうえでかなりの差異がみられたが、交易関係や親族関係が存在しており、トナカイを失った人が海岸部へ出て海獣狩猟や漁撈に従事したこともあれば、トナカイの数が増えたために海岸から内陸部へと移動した人がいたことを指摘しておきたい。

コリヤークの人々は、主にコリヤーク自治管区のなかの村や町を中心にすみ、内陸部のスラウトノィエ村などではトナカイ牧畜を、海岸部のレスナヤ村などでは漁撈や狩猟を主な仕事としている。現在、カムチャッカ半島には7000名あまりのコリヤークがいる。

3．調査地エッソ地区の歴史と現状

ここでは、調査地となったエッソとアナヴガイについての現況をのべるとともに、２名のエヴェン人の女性のライフヒストリーを紹介する。このライフヒストリーによって、いかに旧体制下で、先住民が抑圧され、文化や言語を失ってきたかが明らかになるだろう。私が、調査を実施した1996年末には、先住民独自の文化は老人たちの知識や記憶として存在したが、そのほとんどが現時点では、実践されていないのである。

また、旧ソ連の民族籍制度では、個人が満16歳になると両親のいずれかの民族籍を自分の民族籍とすることになる。統計に出てくる数は、パスポートに記載されている民族名の人数であり、特定の民族の文化や言語の保持者の数とは同じではない。ここでは論じないが、ソ連時代の政策や数世代にわたる異民族間通婚の結果、現在のロシアにおいては、特定の民族と生活様式は必ずしも対応していないことを指摘しておきたい。



（出典）北海道新聞情報研究所編　1996『最近カムチャッカの旅　全ガイド』
北海道新聞より

3－1．調査地エッソとアナヴガイについて

調査地のエッソとアナヴガイは、カムチャッカ半島の中央部の内陸部にある町と村である。それらは行政的には、ビィストリンスキー地区に属し、エッソは同地区の行政の中心地である。エッソは、ペトロパブロフスクカムチャツキーから北西方向に約600キロメートル内陸に入ったところにある。火山に囲まれ、温泉があり、これを利用して暖房が行なわれている。アナヴガイの村はエッソから約20キロメートル離れた所にある。

エッソがある所には、もともと人は住んでいなかった。1926年に数世帯のエヴェンがいたが、町の建設がはじまたのは1932年のことであった。エッソの産業の中心は、トナカイ牧畜や狩猟であった。現在では、金鉱の開発が期待されている。1996年1月1日の時点で、エッソの総人口は2116名である。そのうち先住民人口は540名である。その内訳は、エヴェン481名（男性217名、女性264名)、コリヤーク34名（男20名、女性14名)、イテルメン17名（男性8名、女性9名)、チュクチ2名（男性1名、女性1名)、アリュート6名（男性3名、女性3名）である。この村の4分の3弱はロシア人であるが、残りは、エヴェンとコリヤークである。また、村の家族統計によると、同村の206家族が先住民家族であるという。エヴェンの家族が119家族、エヴェンとそれ以外の家族が48家族、コリヤークの家族が9家族、コリヤークとロシア人の家族が3家族、コリヤークとエヴェンの家族が2家族、イテルメン系の家族が12家族、アリュート系の家族が2家族、チュクチの家族が1家族（ただし一人家族)、チュクチとエヴェンの家族が1家族、カムチャダールの家族が9家族、その他1家族であった。先住民の家族の構成員数の平均は4名で、両親と同居している場合は6から9名であるという。

アナヴガイの産業は、トナカイ牧畜である。1996年1月1日の時点で、村の総人口は621名であり、そのうちの69.7%にあたる433名が先住民である。その内訳は、エヴェン332名（男性156名、女性176名)、コリヤーク101名（男性50名、女性51名）である。この村では、60歳以上の先住民の男性がほとんどいない。コリヤークでは0名で、エヴェンでは2名に過ぎない。ツンドラ上でのトナカイ牧畜のような重労働に従事していること、事故死が多いことやアルコール中毒などが原因で男性は全体的に短命であるようだ。

エッソでもアナヴガイでも行政やコルホーズの仕事をしているのは、ロシア人が多く、村の外でトナカイ牧畜を行なっているのが先住民であるコリヤークやエヴェンの人々である。ソ連政府の崩壊にともない、コルホーズの民営化、年金や給料が物価の上昇率に比しては伸びていないことなどから、先住民の人々は生活に困っている。

3－2．エヴェンのライフヒストリー

ここでは、2名の女性のライフヒストリーを紹介する。このライフヒストリーを提示する理由は、ソ連政府の体制下でエヴェンの文化や言語の維持がいかに難しかった

かを示すためである。

(1)1939年生まれのエヴェンの女性のライフヒストリー

両親ともエヴェンであるAさんは、ビィストリンスキー地区の西海岸にあったエヴェンの村ツヴァヤン(Tvayan)で生まれた。その村の学校に４年間かよった後に、馬に乗せられてエッソの寄宿学校に送られた。当時、彼女は11、12歳くらいであった。エッソの学校には７年余りかよった。毎年、春休みの時に、ツヴァヤンの両親の所に帰った。

ツヴァヤンにいた父はトナカイによってケガをし、母はジャガイモを栽培していた。Aさんの兄は、両親をエッソから350キロメートルばかり離れたローチャン(Lauchan)に連れて行った。彼女は、学校を卒業した後、両親のいるローチャンへ移り住んだ。

そのローチャンで彼女は、1950年に村議会の書記に選出された。当時の村では、建物が建設中で、畑をつくり、馬を利用し、木材を取っていた。しかし小麦粉が少なく、パンは不足していた。

1955年頃に、３人のロシア人がローチャンに送り込まれてきた。集団農場の合併、集約化がはじまり、1960年３月にローチャンとツヴァヤンが合併することとなった。これを契機にローチャンの人口は減少しはじめた。それまで彼女は、休日なしに働き通していた。この合併の時に、彼女は４年間の休暇をもらった。

1960年にローチャンで村ソビエトの長であったエヴェン人の男性と結婚した。一時、ツヴァヤンに移り住んだが、この頃に彼女の夫はエッソに移った。

夫の父親（エヴェン）は、アリュートルスキー地区のハイリノ(Khailino)に住んでいたので、夫婦は1962年ツヴァヤンを離れ、ハイリノに移り住んだ。夫の父は、夫がハイリノを離れることを嫌がったので、結局、夫婦はそこで32年間を過ごすこととなった。彼女自身は、コリヤーク語やチュクチ語がわらず、苦労した。

ハイリノでも人々はAさんがローチェンで村ソビエトの書記をやっていたことを知っていたので、そこでも村ソビエトの書記に選ばれた。彼女は1976年までその地位にあった。彼女の夫は、文化部(cultural byrgade)の職員（ソビエト共産党の宣伝をする仕事）として情報伝達や教育の仕事に携わった。

エッソ地域は、Aさんにとっては故郷であったから、ハイリノにいる間、彼女はいつも故郷をなつかしみ、帰りたいと願っていた。1993年に、夫婦でエッソに帰ってきた。彼女ら夫婦の娘２人はいまでもハイリノにおり、毎週土曜日に電話をかけて連絡をとりあっている。

Aさん夫婦は、年金にたよりながらエッソのアパートで暮している。Aさんは日常生活ではおもにロシア語を話し、エヴェン語を長い間使っていない。彼女ら夫婦は、ソビエト共産党員としていきてきており、エヴェンの宗教や社会慣習を実践してこなかった。

(2)1932年生まれのエヴェンの女性のライフヒストリー

Bさんは、1932年にローチャンの近くのツンドラで生まれた。彼女の両親は、西海岸の近くが主な活動領域で、トナカイの大きな群を所有していた。彼女の父親はトナカイの群の世話をよくしていた。親族とともに山脈に沿って特定のルートをたどってトナカイ牧畜を行なっていた。父の方の親族は漁撈場におり、母の兄弟はトナカイ牧畜を行なっていた。このために、両親のグループは時々、住む所を替えていた。

ところが彼女が4、5歳の頃、ソ連の介入がはじまり、近辺のすべてのエヴェンの人々はローチェンの村に集められた。ロシア人がやってきて、キャンプの大人をテントに集め、長い間、議論していたのを彼女は覚えている。

それから、父のトナカイの群が徐々に彼らのまわりからいなくなったが、その時は悲しかった。そして彼女らはローチェンに住むことになったが、いつも食料不足で飢えになやまされることとなった。両親は当時、ローチェンとツヴァヤンとの間にあるコンモーフという場所（漁撈場）に移り住んだ。父は魚をとったり、冬にはテン、キツネ、カワウソ、クズリなどを狩猟していた。

1941年に彼女は学校に入学するためにツヴァヤンに送られた。そして両親もツヴァヤンに移り住まわされた。Bさんの両親は、集団農場で働いた。母はジャガイモを作り、秋には干し草を作る仕事をした。父は夏には牛を牧畜し、冬には狩猟を行なっていた。トナカイはすべて集団農場のものとなり、彼女の父はトナカイ牧畜に携わることはなかった。ツヴァヤンでの生活は食べ物がなく、かなり苦しいものであった。Bさんは学校が終わると、両親を手伝ってジャガイモを取ったりした。当時、ソ連は魚を取ることを禁じており、エヴェンの人々は集団農場の仕事のみをするように強要されていた。

1955年に彼女は、結婚した。その相手とはその後、別れた。

1964年には、ツヴァヤンから馬で行けば数日かかる東海岸にあるビィストラヤ村(Bystraya)に強制移動させられた。この村は、木材を切り出す所であった。この時には、彼女に娘が一人いた。彼女の父は61歳で1960年に、母は1950年に死でおり、彼女は故郷に帰りたくてしょうがなかった。

ビィストラヤ村での彼女らの生活はきびしく、家屋の状態も悪く、寒かった。村にはトラクターは１台しかなく、木を伐採した後は、木の根っこからオノを使って切り取らなければならなかった。その後、村ではジャガイモやキャベツを栽培するようになった。ジャガイモは主食とし、キャベツは塩づけにして冬に食べた。また、村から５キロメートルほど離れた所の川で魚がとれたので、日曜日、休日や雨で草を干すことができない時には魚を取りに行き、塩づけにした。しかし魚を取りにいく時間はあまりなかった。木材をあつめ燃料とした。この時期には、トナカイの肉を食べることはなかった。

1966年か1967年頃にストライキがビィストラヤ村で起こった。農業だけを行なう集団農場では不十分で、農業、狩猟や漁業を組合わせる国営農場に参加するか、新しい

組織をつくることをエヴェンの人々が望んでいたからであった。

当時、村の助役にあたる女性が辞職し、Bさんがその地位についた。彼女は一生懸命に仕事をし、眠ることができない夜もあった。彼女は、ペトロパブロフスクカムチャツキーやエッソにある上部機関に手紙を書き、村の惨状を訴え続けた。

ビィストラヤ村の人々が魚や肉なしでは生きていけないという理由で、ツヴァヤン村に移り住み始めた頃に、上部機関の方でビィストラヤ村の問題を認識し、集団農場を国営農場へと組織替えすることを承認した。その結果、給料や労働条件がよくなり、人々の生活が改善された。

Bさんは、政府からエッソに移り住んでもよいという許可書をもらった。彼女はそれをもってエッソにはいかず、娘をつれてペトロパブロフスク市郊外のRazdolny市に移り住んだ。そこで仕事を探したが、転居先を書いた書類の関係上、なかなか仕事を見つけ出すことができなかった。しかし、ある集団農場で搾乳の仕事を見つけた。最初は手で搾乳をおこなっていたが、機械を使うやり方を女性の同僚が教えてくれた。アパートに住み、給料もよかったので、良い生活を送ることができた。1966年から1975年まで彼女は娘と都市郊外で生活をしたのであった。

1975年に彼女は娘や内縁の夫（２人目）とエッソに移り住んだ。特別な理由はなかったが、そこに姉が住んでいたし、ロシア人ばかりの生活の中で、仲間のエヴェンの人々をなつかしく思ったからであった。彼女はエッソで牛や子牛の番をする仕事についていたが、内縁の夫が酒を飲み始めたので、いやになって仕事をかえた。集団農場の会計係がその仕事であった。1985年に引退したが、その後５年間は働き続けた。

ソ連が崩壊し、新制ロシアへと変った。自由にはなったが、物価が高くなり、生活が大変苦しくなってしまった。彼女は、現在、月額40万ルーブルの年金をうけている。義理の息子は、身体障害者で月額23万2千ルーブルの生活補助金をもらっている。家族みんなで収入を分けあい、家の電気代、水道代や家賃を支払っている。

Bさんやその娘はロシア人の中での生活が長かったのでエヴェンの言葉や生活慣習を忘れてしまっている。

３－３．民族文化および言語の危機

エッソで、エヴェンの古老の女性に聞き取り調査を行なった第一印象は、エヴェン語、民族暦などエヴェン文化があまり残っていないというものであった。彼女らは、日常生活でロシア語を話しているうえに、エヴェンの「伝統的な」生活を送っていないようであった。さらに、国立民族学博物館の言語データベース用に持ち帰ったエヴェン語のテープを聞いた庄司博史氏によると、エヴェン語の話しの語順がロシア語のようになっており、ロシア語化していると言う。この民族文化と言語の危機的状況は、老人たちからライフヒストリーを聞くうちにその理由が明らかになってきた。

特に、Bさんの両親や彼女自身の若い時の体験を聞くと、政府によって生業活動ま

でが強制的に変えられ、森林伐採、ジャガイモ栽培、干し草つくりや牛の飼育など、トナカイ牧畜や狩猟漁撈とはまったく違った労働に従事せざるをえなかったことが判明した。さらに1930年代より学校教育が行なわれ、ロシア語化が進んでいたことがわかった。

エッソには、いまだにエヴェン語しか理解できない古老もいる。一方、小学校ではエヴェン語のクラスが開設されているものの、子供たちは日常生活ではロシア語を使用している。以下の報告は、1996年におけるエッソでの先住民からの聞き取り調査の結果である。彼らの生活や言葉は急激に変ってきたが、古老はいまだにかつての民族文化や生活についての知識をもっている。消え去る前にそれらを記録に書きとどめることは、我々民族学者の重要な仕事であると私は考える。

4．エッソとアナヴガイのコリヤークの文化と社会

ここでは、エッソとアナヴガイのコリヤークの人から聞き取り調査で収集した情報を項目ごとに整理して提示する。

4－1．コリヤークの生業（アザラシ猟ほか）

この地方のコリヤークの人々の主な生業は、トナカイ牧畜であるが、アザラシ猟とクマ猟についての情報をえた（K-4)。

アザラシの皮は、ブーツの靴底やトナカイ用の投げ縄を作るのに必要である。アザラシの狩猟期は、5月か6月の初旬のみで、回転式離頭銛でとる。この猟には、親子や祖父が行っていた。

ワモンアザラシ(コリヤーク語でmemmel)は、早朝、潮が海岸の方に近づくと、海岸の近くで魚をとる習性がある。その狩猟方法は次のようである。コリヤークは海岸に小さな小屋を作り、ハンターはそこに隠れてアザラシを待つ。水面にアザラシの頭がでると、飛出しそれにめがけて銛を投げる。銛を投げる距離は、7から8メートルである。もし銛がアザラシに命中すれば、5分くらいで死ぬ。それから銛頭に結びつけられた紐をたぐりよせ、アザラシを捕獲した。

アザラシが取れると、ひれや尾を切り取り、海岸で肉を5時間あまりかけて煮たという。腸は裏返して、海水で洗い、乾燥させた。アザラシの脂身は、小さな片に切り、海水で煮た。それをアザラシの胃を利用して作った袋に入れ保存した。冬に干し魚にこの脂身をつけて食べた。

クマを、4、5月か、9月からそれが冬眠するまでの期間に狩猟した。クマの背中の皮は固いが、腹部の皮は薄くて柔らかい。この腹部の皮を渦巻き状に切り取り、細長い紐が作られた。昔は釘を一切使用しなかったので、この紐は犬ゾリを組み立てるための紐として利用された。また、クマの脂身は、サケの魚粉に混ぜて食された。

４－２．コリヤークの狩猟儀礼

トナカイ・コリヤークの狩猟儀礼について、聞き取り調査から次のような情報をえた(K-4)。今回の聞き取りで興味深かったのは、クマ儀礼についてＫ－４は知らないと答えた一方で、オオカミ儀礼、クズリ儀礼やオオツノヒツジ儀礼については実践していたことである。

オオカミは、「すべての季節の動物」であると考えられ、コリヤーク語でガイギニュチャン(gaignjuchan)と言う。オオカミを殺すと、毛皮をはがし、死体を土中に埋める。小さな火をたき、それに食べ物やタバコを投入れ、食べさせる。そしてオオカミに幽霊の人々（死者）の所へ行くようにと祈る。また、「オオカミよ、トナカイの邪魔をするな！野生のトナカイがお前たちの食べ物である。それらを捕まえるために早い足を持て！」と祈る。

クズリ(wolverine)儀礼が存在する。クズリは、その背中に白い輪状の模様がついている。それはドラムであり、クズリは時々、それを取っては叩くという。そうすると大雪など悪天候となるという言伝えがある。クズリを殺すと、毛皮をはぎ取り、その死体をヤナギの枝で作った台の上に、太陽が昇る方に向けて置いた。両耳に切れ目をいれて、ストロー（藁のような植物）をつけた。

オオツノヒツジの狩猟儀礼として、次のようなことが行なわれていた。オオツノヒツジを取ると、頭頂部の頭骨を皿状に切り取り、逆さまにする。それへ血、レバーや他の内蔵の小片を入れ、「我々を怒らないでくれ」と、山に捧げて祈る。その皿は木に引っ掛けられるか、地面の上に置かれた。

４－３．コリヤークの祭り（冬、春、秋、トナカイ出産）

トナカイ・コリヤークは、冬、春、秋およびトナカイの出産の時期にお祭りを行なっていた。

冬のお祭りについてＫ－１、Ｋ－２とＫ－３から次のような情報をえた。３、４０年前の話しと推定される。

冬祭りのことを、コリヤーク語でムガネーニンガン（mganeningan、すべてのキャンプ集団の集いの意味）という。キャンプの長老（通常、父親）が、トナカイ・キャンプの若者に今日、お祝いを行ないたいと告げ、若者が同意すると、すべてのトナカイをキャンプの近くに連れてきた。その中からメスのトナカイを１頭選び、殺した。若者が他のトナカイ・キャンプを訪れ、老人たちを招待しに行った。

一方、テントの方では、祭りの準備を行なった。ホスト側の人々は、やわらかく、薄い良い作ったばかりのコートを着、頭を飾った。女たちは、来客のために肉を煮た。また、トナカイの腎臓、肺、腸、肝臓、すい臓やすじを細かく切り刻み、大きな皿にもった。殺されたトナカイの頭部付き毛皮が、飾られてテントの中に置かれた。

アナヴガイからの訪問者が、トナカイ・ソリに乗って到着し始める。この時、招待

された人々はトナカイ・ゾリの競争に使う良いトナカイを連れてきた。来客は、妻子を連れてくることもあった。まず、招き入れられるまで、来客はテントの外で待った。ホスト側の人は、タバコ、お茶、ウサギの毛、トナカイの肉や脳みそをさらに入れ、それをテントの中や入口の近くにふりまく。次にいろりから灰をとり、来客が外で待っているドアの方向にふりまいた。その後に、来客がテントの中に入ってきた。

ホストの人々は、人形や石のお守りに、肉、魚、肺、肝臓や脳の一部を食べ物としてそなえ、来客と共に食事ができるようにした。食事を始める前に、火の回りでドラムを使って歌い踊った。それから座について、食事をはじめた。

食事が終わると、全員が野外にでた。トナカイレースの開始であった。2頭のトナカイにソリをひかせ、約25キロメートルほどの距離で競争が行なわれた。競争の順位に応じて、野生トナカイ、クマの皮、アザラシの皮製紐やブーツの底部やトナカイ牧畜に使う道具などが賞品とされた。

トナカイの競争が終わると、伝統的なレスリングの試合が行なわれた。このレスリングは、コリヤーク語ではdineneeluと呼ぶ。レスリング用の特別な短いズボンとブーツを身に付け、上半身は裸で行なわれた。相手を後ろに倒した方の勝ちであった。

このレスリング競技がおわると、かくれんぼ、おにごっこなど遊びを行なった。この遊びが終わると、テントに帰り、再び食事をとった。それからみんな家に帰っていった。この冬の祭りの間に上記以外の特別な儀礼は行なわなかったという。

冬祭りの翌日、頭部付きのトナカイの毛皮を干し、頭部は煮て食べたという。この時にも、特別な儀礼は行なわなかったという。

アナヴガイのK－4からトナカイの秋祭り、漁撈の春祭りとトナカイの出産の祭りについて聞き取り調査を行なった。その結果は、次の通りである。K－4は、子供の時に体験した話しをしてくれたが、具体的な儀礼についてはあまり知らなかった。

トナカイの秋祭りは、コリヤーク語でアメック(am'mek)と呼ばれる。アメックとは、お互に会い、とうり過ぎる、の意である。毎年、秋になり、初めて雪がふると、いくつかのキャンプ・グループが集まり、秋祭りが行なわれた。この祭りは、長がければ2週間続くこともあった。この祭りは、夏のフィールドから冬のフィールドへ移行する端境期に行なわれた。

どの場所に集合するかは決っていないが、キャンプ間でおたがいに連絡をとりあって、その年の秋祭りの場所が決定された。ひとつのキャンプ集団は、通常、ひとつの大きなテントに住んでいた。そのテントには、4ないし5家族が同居していた。秋祭りには、5から6のキャンプ集団が秋祭りのために集まったので、70人あまりの規模となった。

人々は、干し魚など夏に集め、貯蔵したものを持って、秋祭りのキャンプへ集まってきた。まず、全体で14頭あまりのトナカイを殺し、そのうちの半分を売り、半分を食用とした。トナカイの肉、内蔵や脳を煮た。K－4は、殺したトナカイに対してど

うのような儀礼を施したかは、知らないという。

この祭りの間は、K－4の両親は酒を飲み、大きなテントで食事をしていた。また、火の回りで、1人1人が順番に歌を歌っていた。この期間中に、親戚に会ったり、結婚式をあげたり、種付け用のオス・トナカイを交換したりした。また、この祭りにカムチャダールを招待したこともあった。

春祭りは漁撈場で行なわれた。毎年、5月ころになると、ベニサケが川を昇りはじめ、緑が多くなり、野生のガーリックもではじめる。また、雪がとけはじめる。集落から12､3キロメートルばかり離れた漁撈場に人々を招待して、2、3日間、各漁撈場でお祝いが行なわれた。この漁撈場には、老人や寡婦が行っていた。そこでの主食は、トナカイの肉ではなく、魚や植物であった。

老人は、大きなシロサケを取り、頭を地面の方に向けて木に吊り下げた。これは、夏に雨がふらないようにという、おいのり（まじない）であった。

この春祭りの目的は、よい夏が来るように、病気にならないように、そしてもっと魚がとれるようにと祈ることであった。

アナヴガイ付近では、3月ころからトナカイが出産をはじめる。この時期は、忙しくあまり儀礼やお祝いに時間をさくことはできなかった。子供のトナカイが生まれた後に、各キャンプごとに2、3日の期間で子供を中心としたお祝いが行なわれた。14歳以下の子供たちのかけっこ競争があり、1位の者には子トナカイが、2位の者にはアザラシの皮製投げ縄が、3位の者にはベルトなどが賞品として贈られた。

4－4．コリヤークの社会（婚姻と相続）

婚姻と相続について、エッソのK－1、アナヴガイのK－5、K－6、K－7から聞き取り調査を行なった。その結果は、次の通りである。

K－1によると、18歳くらいになると、両方の両親が結婚を決めたという。彼女は、結婚のやり方について次のように語った。

母と息子は、トナカイ・ソリ2台で、花嫁候補のいるキャンプへ行った。彼らが、そのキャンプにつくと、食事をし、それから美しく着飾った。その息子と、花嫁候補の娘の父は、トナカイを見に行った。一方、その息子の母は、骨製の取っ手のついたナイフを赤いハンカチで包み、花嫁候補の娘の母のひざの上に置いた。これは結婚の申し込みを意味した。もし娘の母がナイフの入った赤いハンカチを取り上げれば申し込みを受け入れたことを意味し、ナイフを取り上げなければ拒否を意味した。もし、拒否されたならば、母と息子は自分たちのテントにもどり、荷物をまとめて、帰っていった。

一方、結婚申し込みが受け入れられた場合は、次のようであった。花嫁が自分のキャンプを何らかの理由で離れたくない場合は、花婿が花嫁のキャンプに来ることになった。その時には、20頭のトナカイとともに、食器、食物、ソリなどを持って移り住

んだ。将来は、その男性は妻を自分の両親の所へ連れて帰るかもしれなかった。一方、もし花嫁が自分のキャンプを離れ、花婿のキャンプに移り住むことに同意したならば、花婿とその母は５頭のトナカイを相手の両親に贈与した。いずれにせよ、結婚式は行なわれなかった。結婚後、一方のキャンプを訪れる時には、プレゼントを持っていくことがあったし、その逆もあった。

アナウガイのＫ－７は、自分の結婚について話しを聞かせてくれた。Ｋ－７は、(亡)夫を結婚前から知っていた。当時、彼は嫁を探していた。1952年ころのこと、彼はＫ－７の両親の所へきて、彼女の体に触れることもせず、２年間働いた。２年後、彼女の身の回りの物、ソリとトナカイをもらい、２人は夫の両親の所へ移り、新しい生活を開始した。

移動する前に、夫は花嫁の両親に感謝の意を示すために、トナカイを殺し、プレゼントした。それからドラムを叩いたり、踊ったり、食事をしたり、その日は夜まで、宴会をした。この結婚式のようなものは１日で終わった。この式をコリヤーク語では、mng'imang（ムンギーマング）と言う。

アナヴガイでの聞き取りによると、トナカイなど主なものは長男が相続するが、父の物は主に息子が、母の物は娘か息子が相続していたと言う。

４－５．コリヤークの出産儀礼

子供が生まれた時、へその緒を切るが、そこから出た血を新生児の額に指をつかってつけ、そして「ようこそ、幸せな到来」と話しかける慣習がある(Ｋ－1)。

４－６．コリヤークの葬式

Ｋ－１、Ｋ－２とＫ－３からの聞き取りで、次のようなことがわかった。

葬式の時に死者が着る服のことをコリヤーク語では、ヴィアイチャン(viaichan)と言う。男性と女性では服は違うが、生前にそれを準備する点では共通している。服には、ビーズの装飾品がついており、それは月と太陽を象徴している。靴は、人が死んでから靴の底を粗く縫う。

死者を裸にし、死者の服を着せる。靴の底に穴をあけ、少しだけ干し草を入れる。トナカイを殺すが、これは死者が乗るためのものである。死者には、前もって準備していた新しいソリを持たせる。女性の場合には。５ｘ７センチメートルばかりの小さな袋に、針など裁縫道具などを入れて持たせる。それから死体を焼く。焼いた後、丸い石をその上に置く。翌日、人々はそこを去らなければならない。

さらに、Ｋ－４によると、死者を焼いたところには、テントの骨組みのような三脚が建てられる。その上には、鉤状のものが取り付けられている。その近くを通る人は、そこへ行き、死者に食べ物やタバコを供えなければならないと言う。

４－７．コリヤークの名前と命名

エッソとアナヴガイのコリヤークの人に名前や命名について質問をした。いくつか矛盾する回答もあったが、ここではその両方を記述的に報告する。

＊名前

コリヤークは、原則として名前を一つ持つが、男女にはっきりした差異がある。例えば、Tomnegen、 'Yappik、 Yiheigin、Yaujakava、Ye'laginは男性の名前であり、Yamnga、'Yakalga、'Yenni、Eunne、'Yennoi、'Yotvagalは女性の名前である(Ｋ－5,6)。通常、人に動物名、自然現象を名前としてつけることはなく、名前には意味がない(Ｋ－5,6)。一方、名前には意味のあるものもあるという指摘があった。例えば、男性の名であるHaivavは頑丈なの意、Akkinは全てが悪いの意、Koyalliはトナカイの富者の意、kiyavginenはすべてが起きているの意、女性の名のKauchanは光の精霊の意、Icheganは夜明けの意などがある(Ｋ－1)。

また、夏に生まれた子供と冬に生まれた子供には名前に違いがみられるというが、その内容については詳細は分らなかった(Ｋ－5,6)。

＊命名の時期

子供が生まれてから３日後に聖なる石を利用して名前をきめた(Ｋ－1,2,3)。３日後に命名が行なわれるのは、出産後、母が弱っており、回復するまで数日かかるからであるという(Ｋ－1)。一方、アナヴガイでの調査では、子供の出産直後に子供の名前が付けられていた(Ｋ－5,6)。

＊命名のやり方

小石の入ったお守りはアーニヤッペル(anyapel)と呼ばれ、人の健康を守るとされている。この小石は、親戚の者に伝えられていく。このお守り石を利用して新生児の名前がその両親によって決められる。その決め方は、三脚に紐で結んでお守り石をたらす。そのお守り石に向って順番に人の名前を呼ぶ。この小石が動き出したら、その時に呼ばれた名前が子供の名前になった(Ｋ－1,2,3,5,6)。

アナヴガイでは、上記とは少々しがった情報を得た。お守り石が皮製の人形の中に納められているが、その人形には多数のビーズやひもがつけられている。新しい子供が生まれる度に、１インチ程度のビーズの数珠がこの人形に付け加えられる。小さなビーズは子供（の名前）を示し、大きなビーズは出産の過程を示している。この人形を使った命名は、三脚を利用せず、この人形を手で持って下げ、回転させた。すると１本のビーズ数珠が、他のビーズ数珠の紐を巻きつける。巻きつけた紐には、複数の小さなビーズ（名前）がついているが、その中の名前のひとつを新生児に与えた(Ｋ－5,6)。名前を決定するのは、通常、子供の祖母にあたる人であった。最近では若い夫婦はロシア名を子供につけるようになったが、祖母がコリヤーク名を付けているという(Ｋ－5,6)。

コリヤークの人は、命名に夢を利用することはなかった(Ｋ－5,6)。

同じキャンプ集団にいる人と同じ名前を子供につけることはできないとされていた(K－1)。同名者の間には、特別な関係が存在し、呼称にも影響を及ぼす。例えば、エゴの息子と同じ名前をもつJのことをエゴはKemiingan（息子）と呼び、Jはエゴをniif（おじ）と呼ぶことがあった(K－1)。

＊名前を付け直すこと

K－6の姉妹の一人が、子供にバーガル(Ba'gal)という名前をつけたが、その子はどうしても泣き止まなかった。彼女はお守り石を使わずに名前を決めたのであった。ある老人が、間違った名前を子供につけたために、子供が泣き止まないのだと指摘し、改名を忠告した。そこで彼女はその子供にオクサーナ(Oksana)という名前をつけたところ、泣き止んだ。改名と言っても、間違った名前が捨てられたわけではない(K－5)。K－1によると、名前(nanna)は霊魂(yonattiginen)とともに子供の中に入ると言う。霊魂と名前が一致しなければ、子供は泣き続け、正しい名前をつけることが必要である。

4－8．コリヤークの信仰（お守り、火、占い、聖なる場所など）

コリヤークの信仰に関連して、お守り、火、占いと聖なる場所について報告をする。

＊お守り

各家族は、家族全体のお守りとして人間の形をした火起こし板を所有していた。昔は、この板人形を人に見せてはならず、代々女性が管理してきた。トナカイを失った時などこれで火を起こした。この板人形は、人の願いをかなえてくれると信じられている。この板人形は、トナカイの守護神であり、コリヤーク語ではGhichi'giiと言う(K－1)。

また、各個人はgavaki'menganないしgavakaninと呼ばれる人形のお守りを所有していた。このお守りは病気を治すと信じられていた。病人が寝ている下に、お守りを置いたりしていた。月に1度ほど、太陽が空に最も高く昇った時に、トナカイのひずめの箇所の骨の髄をお守りの人形に食べさせる。家族員全員のお守りの人形をいちどうに集めてトナカイの髄を食べさせることもあった(K－1)。

ツンドラにはめったに小石が落ちていないが、まれに見つかることがあった。そのような石は、神が贈ってくれた石であるとみなし、コリヤークは家に持ち帰り、お守り石とする。この小石はコリヤーク語で、kigchanと呼ばれ、お守りの人形の中や袋の中に入れて保管された。この石は雷雨と関連していると考えられている(K－1)。小石の入ったお守りはアーニヤッペル(anyapel)と呼ばれ、人の健康を守るとされている。この小石は、親戚の者に伝えられていく。このお守り石は新生児の名前を決めるのに利用される。

コリヤークの世界には、キリスト教の神に相当するような神は存在しない。良い精霊をmitr'ainと言い、悪い霊をk'ivaiinと言う。コリヤークの人々は、火を通して良

い精霊に食べ物を捧げる。火は予言をしたり、悪霊を追払ったしする。火にまつわる話しを、K－5、6、7から聞き取ったので紹介しておく。

火は燃え、話しをする。人々はその声を聞くことがある。夜、声を聞けば悪い事がおこり、朝、声を聞けば良い事があると人々は信じている(K－1,K－5)。K－5の祖父は、旅に出たが、その夜に火が話しをするのを聞いた。彼はそこにとどまるのをやめ、家に帰ってきたという。

もしだれかとけんかをしたり、襲われたりしたら、燃え残りの灰や炭を取り、何も言わずにテントの外に投げよと教えられている。悪霊を驚かせ、追払う効果がある。同様に、もし夜に変な音が聞えたら、それは悪霊が近くにきていることを示している、あつい炭のついた棒きれをとり、音がした方向に投げよと言伝えられている。

テントをたたむ時には、テントの中のすみずみに植物を置き、火をつけて煙をたてる。すると悪霊が逃げ出すという。燃え残った灰は、道へ捨てる。

コリヤークの人々は、聖なる場所を信仰するという慣習が存在する。聖なる場所は、コリヤーク語でap'papelと呼ばれる。この地方ではap'papelには特別な意味はない(ちなみにこの地方では祖父のことをap'pappoと呼ぶ) とされている。聖なる場所では、人々は火を起こし、その中にお金、ビーズ、針などを投入れ、幸運を祈る。アナヴガイの付近では、時々、煙をはいている丘（火山)、ツンドラ上にある大きな岩、村の入口にある大きな岩、昔、落石事故で多数の人が死んだ場所が、人々から聖なる場所と考えられている(K－5,6,7)。

コリヤークの人々は、トナカイの肩胛骨を利用して占いを行なっていた。肩胛骨の両面を焼くと、多くのひびが入る。もしそれが美しければ、無事を予見し、もし黒くなったりしていれば悪い事が起こると考えられている(K－1)。

ハンターが、小石を首のカラーと首の間のところにおき、それが下に落ちズボンの中を通って下に落ちると、狩猟がうまくいき、そうでなければ不猟の前兆であると考えられている(K－5,6,7)。

また、悪い夢を見た場合、メスのトナカイを神的存在へ供犠し、悪霊を追払う儀礼を行なう。トナカイを殺す前に「悪い事は行ってしまえ。全ての悪夢よ去れ。我々は神的存在に食べ物を与える必要がある」と唱えてから、トナカイの心臓をナイフで突刺して殺した(K－1)。

4－9．コリヤークのシャーマン

アナヴガイのK－6の祖父とK－7の曽祖母はシャーマンであった。シャーマンには、男性でも女性でもなることができた。男性のシャーマンはyin'te'enと呼ばれ、女性のシャーマンはannganeと呼ばれた(K－5,6,7)。シャーマンは病気を治したり、天気を良くすることができた。

エッソのK－1は、シャーマンとは、特別な帽子をかぶったり、ドラムをたたき、

精霊をあやつり、呪術をかける人であり、angalengingと呼ばれ、男性でも女性でもなれると語った。さらに特別な服や帽子は持っていないが、火を使って病人を治す治療しのことはintalangと呼ばれると言う。後者も男性でも女性でもなることができたという。

これら２つの村で情報を得たシャーマンのような存在は、性別によって名称が異なるのか、職能によって名称がことなるのかについては確たる情報を得ることができなかった。

シャーマンは美しい服と帽子を着用し、多数のビーズをさげていた。シャーマンの帽子には、鈴やビーズなど多数のかざりがついている。また、シャーマンの顔が他人から見えないようになっている。この帽子のことをyintapenkenと言う(Ｋ－1)。

Ｋ－５、６、７は、シャーマンの活動についての事例をいくつかあげたので報告する。

事例１

Ｋ－７がトナカイの骨を砕いている時に、その破片が目に入り、危険な状態になった。その時、シャーマンは、山にいるワタリガラス（コリヤーク語でwella)を殺すように命じた。そしてワタリガラスからたんのうをとりだし、たん汁をＫ－７の目の中に落とした。すると怪我が治った。

事例２

小さな子供がナイフの上に倒れていしまい、深傷をおってしまった。シャーマンはそのナイフをとり、もう一度、それを子供の傷口に差し込んだ。そしてそれを引き抜くと子供の傷は治っていた。

事例３

Ｋ－５の息子が４ヵ月間病気で苦しんでいた。その時には、特別な服と帽子をかぶったシャーマンが呪文を唱え、ドラムを叩いた。この治療儀礼に参加したのは、病人である子供、その母親とシャーマンであった。

事例４

Ｋ－６が若い時、シャーマン（Ｋ－６の祖父）がドラムを叩き、予言をして、「お前は妊娠している。そして男の子が生まれるだろう。私はもうすぐ死ぬから、私の名前を生まれてくる子供につけなさい」と言った。果たしてこどもが生まれてきた。Ｋ－６は、その子供にシャーマン（祖父）の名前であったYe'laginをつけた。

事例５

シャーマンはどのような春や冬が来るかを予言することができた。秋の紅葉の時期に、葉が黒っぽい時には、悪い冬が来ると予言した。

事例６

シャーマンは、もっと魚や毛皮獣が取れるようにと祈った。しかし呪文を唱えたり、ドラムをたたくことがへたであると、逆に不漁（猟）になった。

事例７

彼らが知っているシャーマンは良い人であり、他人を怒らない人であった。Ｋ－６の祖父であるシャーマンは、特別なナイフを首から胸に吊り下げていた。そのナイフを取り出した時に、そのナイフに血がついていれば良いことが起こり、血がついていなければ悪いことが起こるとされていた。1951年にそのシャーマンが死に、その時にはシャーマンのナイフに血がついていなかったので、人々は何かが起こると考えた。果たして、彼らの身の上に悪いことが起こった。

事例８

Ｋ－７の曽祖母は、非常に強力な力を持つシャーマンであった。彼女はクマに変身することがあった。Ｋ－７の夫になった男性が１０歳台の時に病気になったが、その原因は不明であった。そのシャーマンは、呪文を唱えながら病人がいるテントの回りをまわり、トランス状態になってからその中に入っていった。その時には、彼女はクマに変身していた。彼女は病人をひきさき、ばらばらにした。しかし翌日になると病人は治っていた。

人々はシャーマンのためにトナカイを殺した。トナカイの毛皮を顔の部分の毛皮がついたままはぎ取られ、肉はすぐに煮て食べられた。残った骨やその他の部分は集められ、火の中に入れられた。枝角のついた頭骨の一部は、保管され、新しい所に移動する時にも持って行った。一方、トナカイの顔の部分のついた毛皮は病人だった子供の寝具として使用された。

事例９

朝、Ｋ－７は裸のままでテントを出て、その回りを１周してから中に入り、ドラムを叩きながら、「良い天気になれ！」と言った。これは天気をよくさせるための儀礼であった。

また、Ｋ－７はやり方はよく分らないが、曽祖母のシャーマンはトナカイの良質の皮でできた空の袋を利用して、よい天気を呼び込んでいた。

事例１０

Ｋ－７の曽祖母のシャーマンは、森にはいり、小さな焚き火をつくり、その灰をみて予言を行なっていた。もし焚き火の灰が燃えきらず、かたまりのままで残っていれば不幸が、こなごなになっていれば幸運がくると予言した。

４－１０．コリヤークのカレンダー

コリヤークの人々は、月の運行を利用した陰暦のカレンダーを持っていたらしい(Ｋ－5,6,7)。オオツノヒツジの角で作ったタバコ入れを利用して、毎日、月を見ながら箱の外部(12月から５月）と箱の内側（６月から11月）へ刻み目を入れていった。12月が一年の始まりであった。

各月の呼称と意味は次の通りである(Ｋ－5,6,7)。

12月　yayavochhin　背中の毛がよくない痩せ細ったトナカイ
1月　l'ule'vet　トナカイの頭のてっぺん
2月　chik'iviv　寒い強風
3月　temmatalo'em　天気がいつもうそをついている、うそつきの月
4月　koyavyo　トナカイの子供が生まれる時
5月　a'noe'el'ev　最初の暖かい月
6月　l'etalo'en　すべてが満開となっている
7月　alayal'il'in　熱の暖かさ
8月　an'chaipan　草が黄色くなっていく
9月　l'echaipen　すべてが黄色くなる
10月　em'michviilu　裸の木
11月　ke'tteploe　オオツノヒツジの交尾期

このカレンダーはコリヤークに関係の深い動物の生態、風、暖かさや草の色の変化といった自然現象にもとづいたものであると言える。

一方、エッソのK－1は、また別の名称を紹介したので、ここで報告しておく。K－1は、カレンダーについてはあまりはっきりと覚えていないと強調した。

1月　lgulevet　一年のまんなか
2月　chekaivivut　最も寒い月
3月　不明（覚えていない）
4月　velekteplyon　トナカイの出産がはじまる
5月　anodegeelan　春の月
6月　anoalagegelagan　夏の月
7月　alaguelegan　冬の備えをすすめる月
8月　annecheipen　冬の準備の真っ最中の月
9月　llegecheipen　すべてが黄色に変る
10月　emmechivilyu　野生植物が色あせ、落ちる、それらを拾う
11月　yayabuchan　雪がふる月

このカレンダーでは、自然とともに人間の活動にもとづいて月の名称が決っている。

4－11．ドラム

ドラムについてもいくつか情報を得たので、ここで報告をしておく。

シャーマンのドラムと一般の人のドラムは異なる。シャーマンのドラムの内側はビーズなどで飾られており、ばちはセイウチ牙でできていた。普通のばちは木製である。ただし、ばちを覆う外皮は、両者ともトナカイの顔面部分の毛皮を使用している。ドラムはyayaiと呼ばれ、ばちはyayai keplengと呼ばれる。

ひとつの家族でドラムをひとつ持つこともあれば、個人で一つを持つこともある。

ドラムは人の精神力を強くするし、家族と火の守護者である。ドラムの音がよくなりひびけば、良いことが起こると信じられている。昔は、新しい場所に移動したら、幸運を呼び込むためにドラムをたたいた。

テントの中からドラムの音が聞えなければ、そのテントの中には生命が存在していないことを示している。近くのキャンプを通りかかった時に、ドラムの音が聞えれば、相手が健康であることを知ることができる。

ドラムの相続に関して言うならば、エゴからエゴの息子か娘へ、また老女が息子の妻にドラムを与える場合が多い。

5．エッソのエヴェンの文化と社会

ここではエッソのエヴェンの古老（すべて女性）から聞き取り調査を行なった成果を記述的に報告する。情報の内容は1920年代以降のものであると考えてよい。

5－1．エヴェンの生業（牧畜、狩猟、漁撈）

村の古老から生業の１年の周期を聞き取り、再構成してみた(E-1)。

春になると、トナカイの子供が生まれた。それから夏の場所へと移動するための準備をした。女性は毛皮の加工をし、衣類を縫った。

夏になると、男たちが集まり、トナカイとともに海岸へ移動した。海岸部にはよい牧草地があり、ハエやアブが少ない。また、海岸部に行くと、エヴェンの男性はアザラシを１、２匹捕まえた。アザラシの脂肪やブーツの靴底を作るための毛皮をとり、肉は煮て食べた。海岸部では、コリヤークやイテルメンと接触することはあまりなかったが、そこで日本人を見かけることがあった。

老人たちは川で漁網やナイ(nai)と呼ばれるマレック（アイヌの突き鉤）のような道具を使ってベニサケ、シロザケ、カラフトマスなどを取った。そして保存用の乾燥魚(kham)や魚粉(olta)を作った。

夏には野イチゴを集めた。この野イチゴは貯蔵せずに、魚肉と混ぜたり、アザラシの脂肪油を加えて食べた。また、kalganと呼ばれる薬となる根、tokarと呼ばれる野生のジャガイモ、Ivachanと呼ばれるエヴェン茶などが採集された。野生のジャガイモはトナカイの血といしょに食べると美味しいと言う。

秋になると、トナカイを移動させた。毎年、10月ころになると、トナカイ牧畜を行なっているエヴェンのグループは、川の近くに戻ってくる。また、オスのトナカイの去勢を行なったり、冬の牧畜や狩猟の準備を行なった。冬の準備としては、次のようなことを行なった。女性はトナカイの毛皮を乾燥させ、加工し、動物の腱糸(umma)で縫い、冬テント(dyu)を準備した。カバの木を利用してトナカイソリやサドルを作った。イヌゾリも作った。また、トナカイの皮でロープを作ったり、夏に取ったアザラ

シの皮で投げ縄(maut)を作ったりした。

冬にはトナカイ牧畜を行なうとともに、クマを鉄砲で狩猟したり、ループ・トラップでテン、キツネ、クズリやカワウソを捕った。

この地域のエヴェンの人々は、ある時期からトナカイ牧畜を主生業とし始めたが、E－11(1926年生まれ) によると、漁撈を主生業とする人々もいたようである。彼女の両親は、トナカイを50頭ほど所有はしていたが、トナカイ牧畜には従事していなかった。彼らは夏はツヴァヤンの近くの漁撈場に住み、darperと呼ばれる漁撈トラップでベニザケ、シロザケやカラフトマスを捕った。冬には、西海岸に近いサノチ (Sanuch) という所で狩猟に従事したという。夏キャンプの構成は、エゴ、エゴの兄弟２名、両親、父の母と母の母の計７名であった。

この漁撈エヴェンの狩猟、漁撈活動は、次のとおりであった。７月の初めから９月の終わりまでは川で漁撈を行なった。８、９月頃になると、オオツノヒツジを狩猟し始めた。秋の初めにイヌゾリを作り、10月に入ると、テン、クズリ、キツネ、ウサギ、リス、カワウソ、夏テンなどを罠猟で捕らえた。この罠猟は翌年の３月半ばまで続けられた。毛皮を売り、コーヒー、茶や砂糖を手に入れたという。

湖が凍結してしまう12月までは、湖上でレッド・フィッシュを捕った。

冬にはトナカイの肉や保存してあった魚を食べた。当時(1926年生まれの女性が子供の時)、村の牧人が村全体のトナカイのめんどうを見ていた。トナカイの肉は、村の中の裕福な人が分与してくれたり、自分たちのトナカイを殺して得ていた。

３月半ばから６月までは、狩猟をしなかった。例外は、４月に冬眠から出てきたクマを捕ることであった。しかしこの時期には湖で氷下の魚（イワナ、サケなど）を捕った。５月にはカバの木を加工し、イヌゾリを作る準備をした。

以上、トナカイ牧畜エヴェンと漁撈エヴェンの生業の年周期を報告した。

次に現在(1996年時点) のエッソのトナカイ牧畜について報告しておきたい(E-6)。K－６によると、エッソのトナカイ牧畜会社には、６つの牧畜チームがある。会社全体で7000頭余りのトナカイを所有し、各チームは1000から1200頭のトナカイを管理している。夏と冬の移動を基本としている。毎年10月か11月頃にトナカイが最もふとるので、屠殺する。1996年は、全部で1000頭あまり屠殺したが、来年の春には同じくらいのトナカイが生まれてくるであろうと言う。現在では、トナカイの個人が所有する頭数には制限がないものの、各個人が管理しなければならない。

K－６は牧畜チーム（＃４）の長であるが、そのチームは自分を含め４、５人の男性と家事賄ないの女性１人（一時的）から構成されている。彼のチームの牧人の関係は、K－６をエゴとすると、エゴの母方イトコと遠い親戚の者２名から成る。各チームは、会社の所長や専門員が決めるために、親族のみから構成されるとは限らないそうである。K－６は牧人としては最高高給取りで、月給は100万ルーブルである。給料は、経歴などで決ると言う。ちなみにトナカイ牧畜には直接参加しないが、事務管

理を統轄するロシア人の所長は月額300万ルーブルくらいはもらっているだろうとのことである。

現在、牧人が抱えている問題は、経済が自由化してからトナカイが売れないこと、そして牧人の嫁不足である。ソ連時代から女性は勉強した後、都市に出て行くことを望み、テレビやラジオのない冬キャンプには行きたがらない傾向がみられた。

5－2．エヴェンの狩猟儀礼やタブー

カムチャッカ半島に在住するエヴェンは、トナカイ牧畜を主生業としているが、聞き取り調査によると、クマをはじめ多数の狩猟および漁撈儀礼が存在することが判明した。

＊クマにかかわる儀礼(E-7)

クマのことをエヴェン語ではkoba'lanと言う。また、さまよっているクマのことをuukuchenと言う。エヴェンは、クマを尊敬していた。彼らはクマの手が人間のそれに似ているために、クマを彼らの祖先だと考えている。

エヴェンはクマの毛皮を処理し、加工している時に、かたい毛皮をスムーズに処理できるように次のように語りかけると言う。「お前は強い。お前は良い。お前は賢い。どうか私を怒らないでくれ。私はか弱い女性である。柔らかくなれ。すべての人間はお前の美しい毛皮が好きだ。柔らかくスムーズになれ。」作業中にこのようにまじめに語れば、クマの毛皮は柔らかくなる。

クマの鼻を切り取り、それをハンターの幸運のお守りに使っていた。

クマの頭部は、斧で切り取り、煮る。クマの頭蓋骨のアゴのところに棒をつっかえとして、クマの口をあけたままにしておく。これはクマが生きていることを示している。クマの頭の肉は聖なる肉である。それはおいしく、男性のみが食べることを許される。クマの頭蓋骨は、１メートルあまりの高さの小さなテントの上に、東を向けて置く。

女性はクマのことを話すことが禁じられている。また、女性はクマの手の部分を食べてはならない。

クマ猟に出かける時には、ハンターは「クマ」と発言したり、クマについて話してはならない。クマは、このことを聞くと怒り出すという。

クマの骨を犬にやることは禁じられている。従ってクマの骨は土中にうめ、その上に大きな石をのせなければならない。クマの骨を埋める時には次のように語りかけた。「みよ。いかにお前が大きいか。いかに偉大で、強いか。我々はお前を殺してはいない。私たちの鍋はお前の骨を入れるには小さすぎる。お前は死んでないぞ。」

狩猟したクマがメスの場合には、カバの木で腕輪や耳飾りをつくり、クマに掛けた。一方、それがオスの場合には、カバの木でメガネを作り、かけさせた。

クマが襲い、殺したり、けがをさせた人の衣服や物は、他人に与えるべきではない。

すべてのケガをした人は、このことを他の人に知らせ、ナイフなどを他人にあげてはならない。その人のものをもっている人は、クマに襲われるとエヴェンの人々は信じている。

Ｅ－８によると、Ｅ－７とは異なり、クマを取っても特別な儀礼はせず、その肉を煮て食べるという。ただし、クマは聖なる動物であるから、クマの悪口を言ったり、笑ったりしてはならないという。また、クマの頭蓋骨は、もとの状態にひもで組み立てられ、テントの近くか、森の中の台の上に置かれる。その時、クマの顔が東の方向を向くようにして置かれたという。トナカイの場合も同じようにして祈るという。

Ｅ－11によると、クマ儀礼のことをgullidyakと言う。彼女のグループでは、クマの頭部を切り取り、三本の棒を使って台をつくり、その上にクマの頭部を置いた。その下で火を起こし、全てを燃やし、残った灰を土中に埋めていたと言う。彼女によると、人によっては異なるやり方で、クマ儀礼を行なっていたと言う。ある人の所では、村人を全部集めてクマの頭部を食べていた。また、別の人の所では、台の上のクマの頭を燃やさずに、そのままに残しておくことがあった。彼女はクマの頭をどちらの方向に向けて置くべきかについては知らないと言う。

＊テンに係わる儀礼(E-7)

ハンターがテンをとって帰ってくると、さらなるテン狩猟の成功を祈願して、ハンターの母や妻が、小さな脂身を火の灰の中にくべる。テンを持ち、煙がテンの方に来るようにする。そしてテンに煙をクンクンと吸わせるまねをさせる。それから脂身でテンの鼻をこする。

＊キツネ、クズリ、オオカミなどに係わる儀礼やタブー(E-7､11)

E-7によるとキツネ、クズリやオオカミは、殺しても儀礼を行なわないという。キツネの場合は、毛皮を国家に供出し、その肉は犬にやる。クズリやオオカミは、毛皮を取ったが、肉は捨てたという。E-11によると、テン、クズリ、キツネ、ウサギ、オオツノヒツジやオオカミについては特別な狩猟儀礼を行なわなかったと言う。

＊漁撈儀礼とタブー(E-11)

７月に１、２匹の魚が取れると、トナカイを殺し、その血を容器に入れて、川に持って行き、川に血を食べさせた。それから川に感謝を述べ、より多くの魚が取れるように祈った。この儀礼は女性のみがとり行なう。エヴェン語でul'lirioと言う。

Ｅ－11によると、漁期には石を川に投げ込んではならないという。また、彼女の祖母は漁撈期が終わると、空を見上げながら何かを祈っていたことを覚えている。しかし、子供だったのでその内容についてはよくわからなかった。

５－３．エヴェンの祭り（冬、トナカイの出産）

Ｅ－７が、エヴェンの祭りについて次のような話しをしてくれた。

エヴェンの人々は、２月の冬祭りとトナカイの子供の出産を祝う祭りを行なってい

た。

４月の半ばにトナカイの子供が生まれると、その前年に生まれたトナカイの毛皮をかかげ、十字をきってから「最初にうまれたトナカイよ。私たちはお前を見て幸せである。」とお祈りをした。トナカイが生まれると、その耳の一部を切り、印をつけた。切り取った耳の一部の総数を数えることによって、何頭生まれてくるかを知ることができた。トナカイの肉を煮て、トナカイの健康を祈った。この祭りは、tugidekやonmurと呼ばれる。

２月の祭りは、eyadyakと呼ばれ、冬の終わりを告げる祭りであった。祭りの中心は、トナカイソリのレースであった。トナカイ・レースの準備が整った人が、他の人に知らせ、この祭りをとり行なった。招待された人々は、レース用のトナカイを連れてやってきた。

人々を招待した者は、招待者用の特別のテントをつくる。訪問者は彼ら自身のテントを建てることもあった。また、招待をした方は、来客のためにトナカイを殺し、新鮮な肉、干し魚やクマの脂身を提供した。

トナカイレースは、まだ夜が明けきらない午前10時ころから開始された。この時にはみんな特別な祭り用の服やブーツを着た。招待をした側の長老が、祝祭の開始を宣言した。

この宣言が終わると、その老人はハンカチのようなもので目隠しをされた。そして誰かが彼に１つの弓と３本の矢を渡した。２人の男性が野生トナカイの毛皮をとり、弓矢の的をつくった。目隠しをした老人は、矢を３回射た。彼は毛皮の真ん中を射ようとした。もし矢が的にあたれば、このトナカイレースは無事であることを意味した。

目隠しをとった老人に的となった毛皮が渡された。彼はそれをツンドラの大地の上に広げ、９人の女性とともに供物として肉、干し魚の一片やタバコをその上にのせ、「幸福な太陽や太陽の慶び」のために捧げた。それからその老人は、その毛皮を持ち上げ、その上にのっている肉やタバコを空中にばらまいた。

次に若い女性が、新鮮なトナカイの血の入ったコップを老人に渡した。その老人は、その血を、「私は、私の大地であるあなたを楽しませる。」と言って、大地に注いだ。血が地面に落ちた時に、湯気が立てば、それは太陽や空への贈り物となった。彼らは、日が長くなり、よい生活を祈り、いろいろな病気から逃れられるようにと祈った。そして太陽へ感謝を捧げた。この儀礼は、太陽への慶びを捧げるもので、okantiryirykennyul'tenと呼ばれる。

それからトナカイ（ソリ）のレースが開始された。まず、参加者の出発する順番が、弓矢競技で決められた。決められた順番で、一人乗り用のトナカイ・ソリは、10から20秒間隔で出発した。

レースが開始されると、キャンプの女性たちは競技に参加した人やそれ以外の人のために食事を準備した。また、犬がトナカイをおどかさないようにつなぎとめられた。

その他の人々は、一ヵ所に集まってトナカイ・ソリが帰ってくるのを待った。もどってくるのが見えると、「早く！早く！」と叫んだ。一位になった人は、特別な所にトナカイ・ソリを置き、トナカイを繋いだ。人々はそこへ彼に会いにいった。そして一位なった人には、若くて美しい女性からエヴェンの袋、タバコ、ナイフ、コートやブーツが賞品として手渡された。また、長老が一位の者に、投げ縄やレース用ソリをプレゼントしたかもしれない。その長老は、二位や三位の者にもトナカイやソリを賞品を与え、その他の参加者にもスキー板やコートなどを贈呈した。

このレースが終わると、キャンプの女性は食事を参加者やその他の人々に提供した。食後は、遊びやレスリング競技を行なった。

この冬の祭りは１日で終わることもあるが、３日間続くこともあった。

エッソでは、1985年にこのような祭りが行なわれたのが最後である。エッソとアナヴガイの集団農場が準備し、両者から８名ずつの代表選手をだし、16のソリで競技が行なわれた。距離は、往復で24キロメートルあまりであり、2､30分で、このレースは終わった。

Ｅ－７から聞き取りを行なったのとは、多少ことなる情報をＥ－１から得たのでここで報告しておく。Ｅ－１によると、冬祭りはistimatyakと呼ばれ、１月に開催されたと言う。いつこの祭りが実施されるかは決っておらず、主催者がソリで近隣のトナカイ・キャンプを回って日程を調整したと言う。この祭りの時には、複数のキャンプがひとつのトナカイ・キャンプの所に集合し、多い場合には10キャンプほど集まることもあった。参加者が多くなれば、１日だけでなく、１週間ほど続くことがあった。手順は次の通りである。①エウケ(euke)という神ないしは精霊にトナカイを殺して捧げた。②トナカイの枝角を東に向けて木にかけた。その根元にトナカイの肝臓、肺などの一部を埋めた。③それからトナカイソリのレースやレスリングや遊びのゲームを行なった。④夜になると、火の回りに座り、ラブソングを歌ったり、ダンスを踊ったりした。彼らはドラムを利用しなかった。女性がパートナーとなる男性を選び、男女が一組になって踊った。一人が歌い、他の人々は踊った。

５－４．交易

Ｅ－４によると、社会主義革命が起こりソ連が成立する以前には、カムチャッカ半島にアメリカ人がやってきて交易をしていたと言う。西海岸のエヴェンの村'Kekukやイテルメンの村Ichaで、先住民の人たちは、アメリカ人や日本人と交易をした。アメリカ人はビーズ、鉄製わな具、ウインチェスター銃、オノを持ってきてエヴェンとクズリ、テンや犬の毛皮を交易していた。また、海岸部には日本人の村があり、漁業に従事していた。エヴェンは毛皮を持って行き、日本人の持っていた食料、ウオッカや酒と交換したと言う。

1920年代も、社会主義革命の影響はエヴェンの村ではすぐに現われなかったので、

革命後も日本人やアメリカ人と交易をしていたと言う。

5－5．エヴェンの社会（婚姻と相続）

エヴェンの婚姻と相続について、複数の古老から話しを聞いたので、ここでは報告したい。

＊婚姻

Ｅ－1(1939年生まれ）は、伝統的な婚姻については詳しくは知らない。しかし、エヴェンにはUyaginkan、Dolgan、Adukanov(?)という３つの親族集団が存在し、エゴの配偶者は、エゴの親族集団以外から選ばなければならない。そして老人たちが嫁や婿をきめるが、料理や裁縫の上手な少女や熱心なトナカイ牧者らを探したという。

結婚してからどこに住むかについては、はっきりした規則は存在せず、両親の意向が重要であると言う。例えば、嫁の両親が貧しければ、助けを得るために婿を自分たちの家に迎える。一方、嫁が夫の家族の所に行って住む場合には、子トナカイかオス・トナカイを２頭くらい持っていく。その逆もある。

Ｅ－5(1955年頃の生まれ）は、自分の結婚について次のように語った。彼女は民族舞踊団の一員であり、その団がトナカイ牧畜民を慰問した時に現在の夫と知りあった。彼女の母は、現在の夫との結婚に反対したが、彼女は自分で結婚を決めた。エヴェンの慣習においても、彼女はUyaginkan集団の出身であり、夫の方はDolgon集団の出身であるため、結婚は許された。現在でも、族外婚の規則は存在するが、このことを若い人は知らない。この規則に反すると奇形児など異常な子供が生まれるとされている。彼女によると、昔は結婚する家族間でトナカイや馬などを交換していたらしいと言う。彼女の場合は、夫の父がすでに死んでいたが、夫の母と同居し、漁撈場や牧畜キャンプで生活をしてきた。

Ｅ－7によると、エヴェンの間には幼児婚約の制度が存在していたようである。女子が生まれると、同じ頃か、以前に生まれている男子と婚約させられたと言う。おもに裕福な家族が婚約をし、それは義務的なものであった。男女ともに婚姻の適齢期は、16歳から18歳でったが、エヴェンの諺には「私が１歳の時に彼女は私のフィアンセになり、私が３歳の時に彼女は私の妻になった。」というものがある。

Ｅ－7は、嫁入りのようすについて語ってくれた。娘が結婚のためにその両親の元を去る時は、トナカイにのり、キャンプの回りを一周してから出て行った。まず、夫が乗ったトナカイ、次に妻が乗ったトナカイ、それから聖なる白いトナカイ(nodoron, ommioronと呼ばれる）が、木製のお守りや花嫁衣裳をのせて続いて行った。この白いトナカイの顔はイヤリングなどで美しく飾られていた。さらにその後に、毛布や寝袋を運ぶ運搬用のトナカイ、食料を運ぶトナカイ、テントの三本柱を運ぶchurakukと呼ばれるトナカイと残りの器材や家財道具を運ぶirookaと呼ばれるトナカイが続いた。

Ｅ－8，9，10のうち、２人は、婚約結婚をしていたが、次のような事例を語った。

ある人がトナカイで移動中に知らない若い娘を見た。その人は自分のキャンプに帰り、このことを未婚の男性に告げた。その未婚の男性の両親は、トナカイなどのプレゼントを持って、その娘のいるキャンプへ行き、娘の両親にあげた。そしてその娘を息子の嫁として連れて帰った。二人は初対面で結婚することになった。結婚する前に、この男女の間に血縁関係があるかどうかがまず確認された。血縁者同士の結婚は、避けられなければならないとされていた。E－11によると、嫁となる女性の両親には10から15頭のトナカイが贈与されることが多かったと言う。

以上、エヴェンの間には族外婚や幼児婚約の制度があったことが分る。また、結婚による居住規則は、夫方ないしは妻方であり、状況に応じて柔軟性に富んでいたと言える。

＊相続

E－1によるとトナカイ、家財道具、ナイフなどは、原則として長男が相続をした。しかし長男が死去したり他出したりしていない場合には、その他の息子が相続した。しかし、娘や息子に分けられる場合もあった。特に、母の所有物（織物やテントなど母が作ったもの）は、娘が相続するのが一般的であった。父が娘にトナカイを分けることもあった。一方、父のナイフや鉄砲は息子が相続した。

E－5によると、馬や道具類は長男が相続するが、死が近づくとすきな人に自分の持ち物をあげることがあった。よい物や生活必需品は、すべての関係者に分け与えた。古い衣類や壊れた物は、葬式の後に悪いことが起きないようにと燃やすと言う。

E－7によると、生前に父は、すべての子供と妻に持ち物を配分することがあると言う。ただし、長男が優先されると言う。

5－6．エヴェンの出産と儀礼

E－7が出産とそれに係わる儀礼やタブーについて次のように語った。

エヴェンの女性にとって、難産や死産が多かったために、子供を生むことはたいへんなことであった。そこでエヴェンの女性は、出産をスムーズにするために、いくつかのタブーを守った。妊婦は家の中にある結び目をすべて解かなければならなかったし、髪の毛を結んではならず、とかなければならなかった。また、腕輪をしてはいけなかった。さらに、クマに襲われる危険があるために妊婦はキャンプから遠くに行ってはならなかった。

出産は、特別な小屋かテントの中で行なわれた。出産に使われるマットはトナカイの毛皮で作られていた。その上に妊婦は2本の特別な棒を松葉杖のようにわきに抱えて、マットに両方の膝をついて立った姿勢で出産をした。

出産の時に子供は頭から落ちて下に敷いてあるマットにぶつかるが、その時におきる音が大きければその子は将来裕福になると言われている。

出産後の女性には、トナカイが殺され、トナカイの血のスープが与えられた。また、

その女性には草を煮た液も与えられた。

生まれた子供にはトナカイとお守りの小さな人形が与えられた。子供が生まれてからその子供の服が縫われた。子供のゆりかごには、男子ならば小さな槍や弓が、女性ならば女性の道具（針、ビーズ、人形）が入れられた。これは将来、男子は勇敢な戦士になり、女子は裁縫や手芸の上手な大人になるようにとの願いを象徴するものであった。

5－7．エヴェンの葬式

Ｅ－１は、エヴェンの葬式について次のように語った。エヴェンの人々は存命中に死者が葬式の時に着る服を作る。その服はtetiと呼ばれる。エヴェンは、死体を燃やさないで、土中に埋葬した。副葬品として、nimkamiと呼ばれる杖、irkanと呼ばれるナイフが棺の中に入れられ、その棺の上にトナカイ用のサドルや投げ縄が置れた。その男の群の中心的なトナカイを殺した。肉は煮てみんなで食べた。このトナカイが死者をあの世につれていくのである。

Ｅ－７は、エッソの一般的な事例を紹介してくれた。死者の葬式用の服は生前に作られる。人が死ぬと、乗物用のトナカイが殺され、枝角付きの頭部の一部を切り取り、墓の近くに置かれる。その上にサドルやナイフなど生活用品をかかげる。トナカイが殺されるが、これは死者が上界へ行くための乗物で、その肉は煮て食べられる。

死者の家に入ると、挨拶をしたり、泣いたりしてはならない。死者をおさめた棺の回りを一周してから、座り、何も話してはならない。棺の近くに死者のための食べ物が少量そなえられる。死者に葬式用の服を着せ、その人のブーツの底に穴が開けられる。普通は、干し草がブーツの中に入れられているが、死者のブーツにはそれをいれることが禁じられている。

棺の長さは、死者の背丈と同じでなければならない。これは棺に隙間があれば、別の人が死にそこに入ると信じられているからである。死者（棺）を穴に入れたら、人は墓のまわりを右回りに回ってはならない。土を一握りかけて、穴にいれる。死体を土中に埋めた後で小さな火を起こし、葬式用の食べ物を投げ入れる。火が消えると、その灰は回りにまかれる。人々は「われわれを怒るな。われわれを襲うな。あなたはあの世に去るのだ。私はあなたをそこへ送る。後ろをふりむかないでくれ。」といって死者に祈る。葬式には、準備に１日、そして２日目に埋められる。

死者の埋められた場所（墓）は、聖なる場所とされる。墓には十字架や棒が立てられているから外見でそれとわかる。墓の上には草を置かなくてはならない。墓の場所に触ったり、掘り返したりすると死ぬと言われている。

キャンプ・グループによって異なるが、一ヵ所に複数の墓をつくることがあるが、昔は多くの場合、死体は死んだ所に埋葬していた。人々は、だれがどこに埋められているかを知っている。だからその近くを通った時には、火を燃やし、食物を与えなけ

ればならないと言う。

5－8．エヴェンの名前と命名

エッソのエヴェンの名前と命名についてE－7とE－8、9、10から聞き取りを行なった。

＊名前

エヴェンの名前には、名前のための名前があり、すべての名前に意味があるわけではない。美しい、利口など人間の特徴を示すような名前、動物や鳥の名前を人間につけることはほとんどない。

男性の名前にはTek'cheni、'Oggorchena、Ogda、Ne'deshiやDe'lenaがあり、女性の名前には'Argo、'Burre、Oo'ken、Poya'ponや'Chandaなどがある。エヴェンの男性の名前と女性の名前は原則として異なる。すなわち名前には性別が付随している。

名前は原則として1つのようであるが、E－7は、Tyrgek（日の出の意）やMaya（正確の意）という2つの名前を持っている。彼女は、日の出の時に生まれたので、Tyrgekという名前が付けられた。これは彼女の正式なエヴェン語の名前である。一方、Mayaは子供の時の名前であるが、現在でも使用している。また、彼女のオジは、ロシア語の名前Sasha、エヴェン語の名前EvveとChandaの計3つを持っていた。このことからエヴェンは複数の名前を持つことがあることがわかる。

人間の名前と霊魂との間には対応関係あるが、現実の人の名前とその人が持つとされる霊魂は必ずしも一致するとは限らない。E－6の息子は、E－6の父と兄の霊魂を受け取っている。これは年をとったシャーマンがその子が生まれる時にE－6の父と兄の夢をみたが、これは2人の霊魂がその子供に入ったことを意味している。新生児には複数の霊魂が入ることがある。

また、人間は尊敬すべき存在であるから、トナカイや犬などに人間の名前をつけてはならないとされている。

＊命名の時期

命名は、子供が生まれてから3、4日後に行なわれることもあれば、名前が生まれる前に決められることもあった(E-7)。E－8、9、10によると、子供が生まれた直後に名前がつけられるという。

＊命名のやり方

命名のやり方には、生まれる前につけるやり方と生まれてからつけるやり方との2つがある。エヴェンの人は、生きている人の名前はつけず、死んだ人の名前を新生児につける。通常、死去した親族の中から新生児の名前が選ばれる。

生まれる前につける場合には、夢が利用される。例えば、子供の親が死んだ両親や祖母の夢を見たりすると、夢に出てきた人の名前をつけたりする。生まれてから名前をつける場合には、生まれてから3、4日の間、子供の蒙古斑（うみ印）を観察し、

だれの霊魂が子供に入ったのかをみきわめた上で、名前を決定する。

名前を決定するのは、新生児の両親や、存命であれば祖父母である。

＊名前を付け直すこと

昔は子供の名前と子供に入った霊魂が対応していない場合には、子供の名前を対応するように改名することがあった。例えば、命名された子供が泣きやまないことがあった。このような場合は、名前と子供に入った霊魂とが一致しないと考えられた。別の名前が付けられ、子供が泣きやむと、それが正式な名前となった。単に新たに正しい名前を子供に付け加えることもあった。

また、名前と霊魂が一致しない場合でも改名しないことがあった。Ｅ－７が言葉を話しはじめた頃、彼女は彼女の祖父のところへきて「なぜ私がわからないのか？」と言った。祖父は孫娘が亡妻であることを知った。すなわち祖母の霊魂が孫娘に入っていたのである。しかし彼女の名前を、祖母の名前にかえることはなかった。彼女は、小さな時に祖父の亡妻のように振る舞った。彼女のオバや父は、彼女のことを「私のおかあさん」と呼ぶことがあったという。

＊同名者

エヴェンの人々の間には、特別な同名者関係は存在しない。しかし、名前を同じくする人どうしは名前で呼びあうべきではなく、お互に敬意を表わすために"gerbe"と呼びあうという(E-7)。同じ名前を持つ者が、同じ家の中にいる場合はお互に良い感情を持っている。そして両者の間では特別な呼び方をする場合があった。Ｅ－８、９、10は、同じ家にいる老女と娘が、姉(ekkeke)と妹(ennene)と呼びあっていたことを紹介してくれた。事例は少ないものの、同名者間では特別な呼称が使用されたり、呼称体系に影響を及ぼすようである。

５－９．エヴェンの世界観と信仰

＊世界観と霊魂

エヴェンの人々の間には霊魂が輪廻すると言う思想がある。天界('boonil)にいる死者の霊魂は再生して子供の所に来る。輪廻した霊魂はanenniと呼ばれ、霊魂それ自体は'emdiと呼ばれる。新生児には死んだ人の名前が付けられるが、名前と霊魂は一致することが望ましい。また、トナカイも霊魂をもっており、子供が生まれると死んだトナカイの名前がつけられる(E-7)。

*信仰

Ｅ－５は、ロシア正教とエヴェンの宗教の両方を信仰している。彼女の母はイコンを持っていたからロシア正教を信仰していたかもしれないと言う。ある老人はイコンを持っていたが、死んだ時の葬式の服は頭の上に穴のあいた小さな帽子をかぶっていた。これはエヴェンの伝統的なものであった。宗教はソ連の時代に禁止された。エヴェンの人たちはeukeという神を信じていたが、現在ではその数が少ない。

＊聖なる場所

エヴェンの人々はulakichと呼ばれる聖なる場所に敬意を持っている。この聖なる場所は、山や岩場、何か特別な事件が起こった所（人が死んだ所や通ると馬がいつも足を折る所）である（聖なる場所はeukeの神がいる所ではない。エウケ神はどこのでもいる)。そのような場所はごみなど捨ててはならず、つねにきれいにしておくべきとされている。この場所に近づくと、火に食べ物を与えたり、eukeという神に祈ったり、安全を祈願してトナカイを供犠したりする(E-1)。

Ｅ－５によると、供犠したトナカイの枝角がついた頭部の一部（皿状）にトナカイの内蔵の一部をのせ、小山や突起した場所に置くと言う。そのトナカイの頭部は聖なる場所の方に向けられる。その時には、「山よ。私たちはあなたの所にきた。さあ、ここにあなたの食べ物がある。満足されよ。われわれの前途に幸あれ、そしてトナカイが病気にならないように。」と祈ると言う。

＊火

火はエヴェンにとっては神聖なもので、信仰の上で重要である。Ｅ－１によると、エヴェンの人々は火がよく燃えると、すべてがよいと信じている。エヴェンは、火を通してeukeに祈りを捧げる。彼らは火に茶、タバコや少量の脂身をなげいれ、祈る。火は、象徴的には男でも女でもなく、かつだれが起こしてもよい。ただし、儀礼用の火は男性の長老が起こすことになっている。この火は、家の中の調理や照明用の火とは異なり、特別にたてられる。この火を利用してタバコを吸ってはならないとされている。Ｅ－１は、現在でも、若者には酒を飲む前やトナカイ牧畜の仕事に出かける前に、脂身を火に与えるように教えている。また、ツンドラを移動している時には、残った食べ物やタバコを火に捧げるようにと教えていると言う。

Ｅ－７は、火は家族がよい生活をおくるための守護者であるため、食物を与えるという。また、エヴェンは、火を通して食べ物を守護神(it'tooddin)に与えるとも言う。火は男性でも女性でもあり得るが、それを管理するのは女性である。また、火に対して行なってはならないことを３つ指摘した。第一の禁止は、火は祖父や祖母であるため、するどい刃物や道具で火を触ったり、切ったりしてはならないということである。第二の禁止は、木の実やつぼみを火の中に投げ入れてはならないというものである。そして第三の禁止は、枝で火を触ってはならないというものである。

人が死ぬ時にも火に食べ物を与えるし、火に食物を与える儀礼を通して死者は食物を得ると言う（E-8、9、10)。

＊お守り

エヴェンの間には、人形のかたちをした２種類のお守りがある。一つは個人のお守りで、もう一つは家族全体のお守りである。

家族のお守り人形は、ivkivii'kenと呼ばれ、女性によって管理される。この人形は家族以外の他人に見せてはならず、娘や息子の妻によって受け継がれる(E-7)。こ

の人形は個人の人形よりも大きく、トナカイの毛皮でできている(E-7)。

小さな人形が作られ、生まれてきた子供の枕元に置かれる。その人形は守護神であり、その子供の一生のお守りとなる。その人が亡くなると、それはいっしょに土中に埋められる。そのお守り人形はbii'kenやbiyakanと呼ばれ、守護神はonibidenと呼ばれている(E-7)。

＊予言

エヴェンの人たちは、トナカイ、クマやオオツノヒツジの肩胛骨を利用して予言を行なった。火で肩胛骨をあぶってから、灰の上で注意深く焼いた。砕けたり、焼きすぎないように注意した。しわが骨の上に出始めると、火から離した。肩胛骨が冷却すると線があらわれるが、その線を読んで予言をした。Ｅ－７の父は、だれがどこから来て、どこへ行くのかという予言、トナカイをなくした場合、それらがどこへ行ったのかと言う予言、天気の予言やどこの牧草地へ行くかがよいかという予言、狩猟の成功、不成功の予言を行なっていたと言う。肩胛骨が壊れた時は、不運や良くないことが起きる兆候であると言う。

＊儀礼

エヴェンの間には、訪問儀礼や天候をよくする儀礼が知られている。

漁撈エヴェンが、トナカイ・エヴェンのテントを訪れると、テントの主婦がいろりから灰をとり、漁撈エヴェンが歩いた後に灰を落としていった。次にその主婦は、訪問者に少量の肉を与えた。訪問者はそれを火にくべ、火に食物を与えた。これは悪霊に対抗したり、かぜや頭痛から身を守るための儀礼であった(E-11)。

漁撈エヴェンが、トナカイ・エヴェンを訪れ、そこで一晩を過ごす場合、彼らは食べ物を持参して行った。初めてのテントで寝る場合には、食物やその他のものを火にくべて、夜を無事に過ごせるように祈った(E-11)。

大雪が降った時に、E-11の祖母は生まれたばかりのトナカイの全身の毛皮を木の枝にかかげ、祈っていた。それは天気を良くする儀礼であると言う。

Ｅ－７が母から教わった、風向きを変え、天気を良くする儀礼が存在する。これは女性が行なう儀礼である。火の北側に座り、木製の皿器をとり、テントの戸を開いてから、「北風よ。風で連れ去ってしまえ！」と言いながら、バタバタと上下に風を送る。それからカバの木の枝を取り、上に向って振り回す。そうすれば風向きが変り、天気がよくなると信じられている。

＊呪術

エヴェンの間では、悪い呪術をかけることをirgevenと、そして良い呪術をかけることをunkevinと言う。Ｅ－７の両親が悪い呪術をかけられた事例を紹介してくれた。

1953、4年頃、Ｅ－７の母は裕福な家の出身であったので、まわりの人々からうらやましがられていた。Ｅ－７の家のトナカイが病気になった時に、父はだれかが悪い呪術をかけていると主張した。キャンプの近くにそれと思い当る人々が住んでいた。

両親は彼らの所へ行き、テントに住んだ。

Ｅ－７は大好きなトナカイを持っていたが、祖父が呪術をとくためにはそのトナカイを殺さなくてはならないと言った。そして祖父はそれを殺し、枝角がついた頭蓋骨の一部を森の中へ持って行き、そこで人間の背丈ぐらいの高さの小さなテントの枠組みを立て、その上にその頭骨を置いた。その枠木の下においた乾燥草に祖父が火をつけた。祖父は歌を歌いながら（これは祖父が呪文を唱えていたのかもしれない)、ばらの茎のような植物を細かに切り刻み、小さな粉にしてその火で燃やした。さらに祖父は、その火にトナカイの血を加えた。小さな火ですべてを燃やし、灰も捨て、何も残してはならなかった。枠木からトナカイの頭骨をとり、より高い木の上にかかげた（木が無い時には、そのまま枠木の上においておく)。こうすればトナカイが呪術の呪いをどこかへ持ていく信じられていた（トナカイでなくても犬でもよかったと言う)。

５－１０．エヴェンのシャーマン

Ｅ－１（1939年生まれ）が子供の時にはシャーマンがいたが、大人たちは子供にはその儀礼を見せてはくれなかった。シャーマンのことをa'manと言う。シャーマンは男性でも女性でもその素質（憑依状態に陥ることができる素質）を持っていればなることができた。シャーマンは帽子、儀礼用ブーツ、オオカミの鼻と唇、袋状のポケットのついたベルト、悪霊を追い払う草や、他人には見せてはならない特別なドラムなど特別な衣類や道具を持っていた。シャーマンは、歌を歌い、ドラムをたたき、夢を見た後、将来の予言や病気の治療を行なっていた。

Ｅ－７は、シャーマンによる次のような治療を受けた体験を持っている。彼女は３歳頃まで歩くことができなかった。ソ連時代はシャーマンが抑圧されており、だれがシャーマンであるかわからなかった。1951年のこと、シャーマンのような男（母の姉妹の夫であり予言する能力を持っていた人物）が彼女の所にやってきて、すぐさまトナカイを殺し、その血をつくる臓器である脾臓（肝臓の誤りと思われる）を取り出し、それでもって彼女の足をさすり、歌をうたった。彼がどのような治療能力を持っているか知らないが、彼女は歩けるようになった。

このようなシャーマンのサービスに対して通常は返礼をしていなかったようであった(E-8、9、10)。

５－１１．カレンダー

エヴェンの民族暦（カレンダー）や季節について聞き取り調査を行なったが、インフォーマントの大半がよくわからなかったり、覚えていなかったりした。Ｅ－１とＥ－７の二人から聞き取ったことを報告しておく。

エヴェンは、体の部分を利用して月の名称としていた。

まず、Ｅ－１の情報を整理して、提示する。

太陽暦	エヴェン暦	意味
１月	aya	頭部のてっぺん
２月	mir	肩（左側から）
３月	nylka	ひじ
４月	biily'an	手首の間接部分
５月	neiny	くるぶし
６月	dugany	指の第二関節
７月	不明	指の第一関節
８月	neiny	くるぶし（右側へ）
９月	biily'an	手首の関節
10月	nylka	ひじ
11月	mir	肩
12月	aya	頭部のてっぺん

季節の呼び名は、１、２月がtugany、３、４、５月がneiny、６、７、８月がdugan yで、９、10月がmontalshi、そして11、12月はbolonyであった。

Ｅ－７から聞き取った民族暦と季節名は、上述のものとは多少違いがみられる。Ｅ－７によると、月は頭から始まり、自分の左肩、左腕、左手、右手、右腕、右肩の順に進むという。また、彼女は１年を６つの季節にわけた。

太陽暦	民族暦	意味
１月	aya	頭部のてっぺん
２月	mire	肩
３月	'echen	上腕
４月	bilen	ひじ
５月	unma	手首
６月	djallan	押しあてられた指
７月	unma dugani	手首それ自体
８月	bilen montelshi	ひじ＋秋
９月	echen montelshi	上腕＋秋
10月	mire oichepke	肩腕
11月	boloni	ほとんど肩
12月	dalan	肩

さらに季節は、冬がtugany、３月から５月の春がnilke、晩春（６月頃）がnig'ny、

夏がdugany、秋がmontalshi、晩秋がbolonyである。

6．コリヤークとエヴェンについての比較

次に、本稿で報告した生業、狩猟儀礼、祭り、婚姻と相続、出産、葬式、名前と命名、信仰や世界観（お守り、火、呪術、聖なる場所）、シャーマン、カレンダーなどに関して、コリヤークとエヴェンとを比較し、両者の文化および社会の上での異同を見てみたい。

＊生業

現在のエッソ地区のコリヤークやエヴェンの主な生業（仕事）は、トナカイ牧畜であり、共通している。ただし、牧畜チームは同じ会社に属していても、異なる民族から構成されているようである。また、チームの構成は、会社の所長や専門家が決めるので、近親族からなるとは限らない。

トナカイ牧畜を主生業とするエヴェンもコリヤークも夏には、海岸へ行き、各家族で１、２頭のアザラシを捕獲し、脂身やトナカイ牧畜用の投げ縄をつくるための皮を取っていた。トナカイ牧畜民も海獣狩猟に従事していたことがわかる。また、冬から秋にかけては、テンなどの罠猟も行なっていた。一部の人々は川で漁撈にも従事していた。すなわち、彼らの生業形態は、トナカイ牧畜を中心にしながらも複合的なものであった。

今回の調査の成果のひとつは、ソ連がカムチャッカ半島を支配し始めた頃まで、エッソ地区には漁撈と狩猟を主生業とする狩猟・漁撈エヴェンが存在したことが判明した。さらに興味深いことに、現在でもエッソの村に住まず、漁撈場に１年を通して住み、自給自足を基本とするエヴェンの古老たちがいることもわかった。彼らがどういう人たちで、どのような生活を送っているかを調査する必要がある。

以上の知見を総合すると、この地区のコリヤークやエヴェンがトナカイ牧畜だけを専従的に行ない始めたのは、ソ連政府の経済の集団化が行なわれた1930年代以降であろうと推測される。

＊狩猟儀礼

エッソ地区のトナカイ牧畜を主生業とするコリヤークは、オオカミ、クズリやオオツノヒツジについては狩猟儀礼を持っている一方で、クマの狩猟儀礼は実践していなかった。私たちが1994年の夏に調査したレスナヤ村の漁撈・狩猟コリヤークはクマの狩猟儀礼を実践しており、同じコリヤークでも大きな違いが見られる(岸上 1995:62)。

一方、エッソ地区のトナカイ牧畜エヴェンの間には、クマ狩猟儀礼やクマに係わるタブー、テン儀礼が存在するものの、クズリ、オオツノヒツジやオオカミなどに関する儀礼を保持していなかった。

このように同地区のコリヤークとエヴェンとの間には、狩猟儀礼の間にかなりの違

いがみられた。

＊祭り

今回の調査では、コリヤークの間には、春のトナカイ出産祝い、春の漁撈祭り、秋祭り、冬祭りなどがあることがわかった。一方、エヴェンは、２月の冬祭りと４月頃のトナカイ出産祝いを行なっていた。

これらの祭りは、おもにトナカイの季節移動や出産に係わる祭りであったが、聞き取った内容は、ソ連体制下で行なわれたものであったために、食事、歌と踊り、トナカイレースやレスリングなど娯楽的な側面が強くなっており、祭りの中の宗教儀礼に関する情報はあまり集めることができなかった。

一年の祭りの回数は、コリヤークの方がエヴェンより多いようである。

＊婚姻

エッソ地区のコリヤークの婚姻は、２年間ぐらい花婿が花嫁の父親のキャンプで働いてから、妻を自分の父親のキャンプに連れて行くことが知られているが、花婿が花嫁の父親のキャンプに住み続ける場合もあった。婚姻に際してトナカイの贈与が花婿側から花嫁側にあった。

一方、エヴェンの間には、族外婚の規則があった。また、富裕層の間では幼児婚約制度が実践されていたようである。結婚をした後の居住場所は、夫方ないしは妻方であり、状況に応じて柔軟性に富んでいた。この点は、コリヤークと同様であった。

＊相続

アナヴガイのコリヤークからの聞き取りによると、トナカイなど主なものは長男が相続するが、父親の所有物は主に長男をふくめた息子に、母親の所有物は娘か息子が相続していた。主要な財産は父系相続であった。

エヴェンの場合は、トナカイや家財道具などおもなものは、原則として長男が相続した。そして母の所有物は原則として娘に相続された。しかし、父や母が生前に息子や娘などに分与をあらかじめ指定する場合もあった。

両者ともトナカイの群に関しては、長男相続が一般的であったようである。

＊葬式

エッソ地区ではエヴェンもコリヤークも生前に死者が着る葬式用の衣服を作る。そしてトナカイを屠り、それに乗って死者は天界に送られると考えられている。しかしコリヤークは死体を焼くのに対し、エヴェンは焼かずに土中に埋めることが一般的であった。

＊名前と命名

コリヤークの名前も、エヴェンの名前も、性別がはっきりしている上に、意味をもつものがあった。

命名に関しては、コリヤークは聖なる石（お守り石）を利用するが、エヴェンは夢や子供を観察することによって、だれの霊魂が子供に入ったかを判断してから子供の

名前をきめるという差異がみられた。また、コリヤークは生きている人の名前でも子供につけることが許されたが、エヴェンの場合は死んだ人の名前が原則として子供につけられた。

＊信仰（お守り、火、占い、、予言、聖なる場所、呪術）

エヴェンもコリヤークも新生児には霊魂が入ると信じている。エヴェンの間には、はっきりとした霊魂の輪廻の思想が存在していた。

両者とも聖なる場所の信仰、火の宗教的な重要性、トナカイの肩胛骨を利用した予言など共通する点も少なくない。コリヤークのお守りは人形、発火板、石などであるが、エヴェンのそれは人形であった。

＊シャーマン

エヴェンにおいてもコリヤークにおいても病気を直したり、予言をしたり、悪霊退治などにおいてシャーマンは重要な役割を果たしていた。ソ連体制下では、シャーマンやシャーマニズムは非マルクス主義的な迷信であるとして抑圧されたり抹殺されてきた。しかし今回の調査では、カムチャッカ半島においてはつい最近までシャーマンは存在していたようである（現在も存在している可能性が大である）。

＊カレンダー

コリヤークもエヴェンも月の運行を利用して時間の認識をしていたようである。両者のカレンダーを復元しようとしてみると、古老があまり正確には覚えてはおらず、かつインフォーマントによっては月の名称として異なる表現を用いていた。

両者のカレンダーを比較して大きく異なる点は、次のようなことである。コリヤークのそれはトナカイの状態、草木の変化、温度や雪といった自然現象の変化をさす名称を各月を示すために用いているが、エヴェンのそれは、人間の身体部分の名称を利用して、各月の名称としている。後者の名称では、周期的な１年の自然の変化が反映されていないのである。

以上、エッソ地区に住み、ともにトナカイ牧畜を主生業とするコリヤークとエヴェンの社会と文化を、今回の調査結果をもとに比較してみた。生業という自然への適応様式は基本的に同じでありながら、その言語、文化や社会には多少なりとも違いがみられた。この相違は、エヴェンはもともと狩猟・漁撈民であったが、西からカムチャッカ半島への移動の過程でトナカイ牧畜の技術を習得し、カムチャッカ半島に住みついたという歴史的な要因によって説明がつくかもしれない。

７．まとめと今後の課題

本稿では、私が聞き取り調査をしたエッソのコリヤークとエヴェンの社会と文化について報告した。同じ民族に関することでも、インフォーマントによって異なる見解

や相い矛盾するような情報があったが、そのような場合は両方の情報をここでは、報告した。報告した内容は、話者の生年などから推定して、1920年代以降のことがほとんどであると考える。

現在のエッソおよびアナヴガイは、ロシア人、エヴェン、コリヤークやその他の少数先住民族、すなわち複数の民族が住む居住地である。この共住は自然発生的というよりも、ソ連政府の政策の結果である。そのような状況のもとで何世代にもおよぶ異民族通婚や転出入が繰り返され、さらにソ連化教育が50年以上にわたって実施されてきた。個人に目を向けた場合、その人物が何民族であり、どのようなアイデンティティを持ち、どのような生活を送っているかということに着目すれば、純粋なエヴェン民族やコリヤーク民族の人は極めて少ないと言えよう。特に、ソ連時代にパスポートに記載する民族籍が本人の選択によって決められるという制度により、個人の生活の実態と（言葉を含む）民族文化の間には、乖離が見られ始めてきた。民族籍の上では、コリヤークであるとしても、コリヤーク語は話せず、コリヤークの文化についてほとんど知らない若者が存在するのである。現在の時点で、コリヤーク語、コリヤーク民族、コリヤーク文化や社会を従来の民族学的概念と調査方法によって問題なく研究できるとは言えないのである。ここに現在のロシアにおける民族文化調査の難しさがある。

1920年代以降、カムチャッカ半島の先住民はソ連政府の体制下でもろもろの変化を体験してきている。そして1990年代の新制ロシアの誕生までの約70年の間に彼らの身にどのような変化が起こってきたかは知られてはおらず、それに関する体系的な研究も存在していない。すでに指摘したように、カムチャッカ半島の先住民の言語や文化はすでに大きく変容したり、消滅しかかっている。1994年と1996年の同半島での現地調査に参加した感想は、現在ならば、古老から聞き取り調査によって、彼らの言語や民族文化を記述し、記録に残すことができるのではないか、というものであった。ロシア極東における言語学および民族学的調査を早急に実施すべきであると考える。

今後の調査に関し、簡単な構想を提示しておきたい。

（1）カムチャッカ半島全域において民族学的および言語学的調査を行ない、現状を把握するとともに、各村や町の現状を民族学的調査によって記録に残す。このためには広範な踏査による全体の把握と、長期の住み込み調査による個別村落調査が実施されるべきである。

（2）古老とのインタビューや考古学的成果を利用して、できる限り古い時期の社会や文化を復元するように努めるとともに、同地域の植民や政策の歴史を調査、研究すべきである。民族学者、考古学者、言語学者や歴史学者が協力して調査研究を計画し、実施することが望ましい。

（3）そしてカムチャッカ半島の先住民の社会および文化的現状がどのような変化の過程を経て生み出されてきたのかを解明すべきである。

ここで提案した計画が実行されてはじめて、カムチャッカ半島の先住民文化やその歴史を、北太平洋沿岸やオホーツク海沿岸と言う大きな枠組みの中に位置付けて比較研究を行なうことができると思う。学際的な研究者集団によるカムチャッカ半島の先住民社会の調査の実施は、21世紀を迎えようとする日本の民族学者（文化人類学者）の緊急課題の一つであると考える。

＊本研究は、小樽商科大学の大島稔教授を代表とする平成８年度文部省科学研究（国際学術研究）「カムチャッカ半島民族芸能調査／コリヤクとアリュート」（課題番号08041002）によるロシア調査の成果の一部である。調査隊の谷本一之先生、大島稔先生、甲地利恵さん、A. Badayev先生、そして本文中に名前を記したインフォーマントと通訳の方々に心から感謝の意を表わしたい。また、本稿の一部を、国立民族学博物館の共同研究会「北方社会の交易」（代表者大塚和義教授　平成８年度第４回研究会1997年３月23日開催）において報告し、参加者から質問やコメントを頂いた。記して感謝の微意をあらわすものである。

参考・引用文献

岸上伸啓

1995「ロシア極東民族コリヤークの宗教と社会について」　谷本一之編　pp.57-69.『北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム報告』北海道教育大学

1997「コリヤーク民族誌点描」『環オホーツク 1996』第４号　pp.1-28.　紋別市：北の文化シンポジウム実行委員会

（国立民族学博物館　第一研究部）